

# 麗澤教育

第14号

平成20年(2008年)4月

特集：道徳教育の現状と課題  
～道徳科学の授業から～



マンリョウ

## 『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。平成7年より毎年1回発行しています。

# 麗澤教育 第十四号 〈目次〉

## 〈フォト・アルバム〉この一年①

## 〈特別寄稿〉

麗澤大学創立五十周年、道德教育のさらなる進化を求めて―道德科学教育センターの設立―……中山 理……………6

## 〈学部改組〉

外国語学部の改組と新カリキュラムの特徴……………奥野 保明……………14

国際公共人をめざして―新たな経済学部の出発―……………高辻 秀興……………20

## 〈特集〉道德教育の現状と課題 〈道德科学の授業から〉……………26

① 「道德科学」の授業―私の場合……………岩佐 信道……………28

② 生きる知恵の探究―道德科学の教育目標……………水野治太郎……………35

③ 「いのちのつながり」を求めて―私の授業報告（道德科学A「道德科学B」）……………北川 治男……………40

④ 私の道德科学の授業……………山田 順……………46

⑤ チーム道徳科学、その可能性……………杉木 康人……………53

〈コラム〉

1 二代目千英先生……………池田 裕……………59

2 麗澤大学麗澤会の今後の課題……………梶 浩……………69

3 麗澤の生活……………孫 亦楊……………74

〈フォト・アルバム〉この一年②

〈麗大生の今①〉

1 私が感じた麗陵祭 ～海の日 Home～……………遠藤千帆未……………77

2 「漢語橋」世界大学生スピーチコンテストに参加して……………谷口 華奈……………81

3 成田歩き……………保泉 圭佑……………85

4 一期一会―一泊二日体験入学を通して―……………田中 幸恵……………89

## 〈麗大生の今②〉

- 1 「麗澤」という校名を胸に―硬式野球部……………佐藤 光英……………93
- 2 弓道の魅力―弓道部……………出羽 烈……………97
- 3 部に昇格し積極的に活動―きもの&お作法の会……………橋口絵理香……………101
- 4 合唱部の成長に期待して!!―合唱部……………鈴木 聡美……………104

## 〈卒業生の今〉

- 1 二〇〇七年を振り返って……………国枝 慎吾……………108
- 2 薔薇を通して心の交流……………葛西 照美……………112
- 3 感動を与えられるようなゴルフ―に……………岩津 賢典……………115

※寄稿して頂いた在学生の学年は、平成十九年度のものです。





『きもの装いコンテスト世界大会学校対抗の部』で一位になった喜びの三人(2007・4・1)



楽しかった留学生懇親会から(2007・4・20)



本学で開催された韓国最高経営者倫理研修会(2007・5・8~11)



漢語橋世界大会で二位を獲得した中国語学科二年の谷口華奈さん(2007・8・3~13)



米国のセント・マーチンズ大生が来学(2007・5・24)



本学の名誉博士号を贈られた犬養道子氏(2007・6・13)



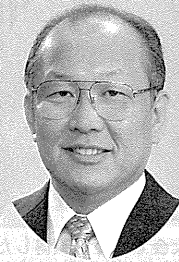
日本語学会第134回大会を本学で開催(2007・6・16~17)

〈特別寄稿〉

# 麗澤大学創立五十周年、 道徳教育のさらなる進化を求めて

—道徳科学教育センターの設立—

学長 中山 理 おさむ



## 麗澤大学の教育の原点へ

麗澤大学の原点は、一九三五年（昭和十年）に学祖廣池千九郎が創立した道徳科学専攻塾にまで遡る。道徳実行の効果を科学的に実証し、世界の平和と人類の幸福実現の道を確認しようとした廣池は、「モラロジー」と名づけた新しい学問を、学校教育と社会教育の中で組織的に展開しようとした。しかしながら道徳科学専攻塾は私塾であったため、より広い社会的ニーズに対応するには、それを「専門の大学を首め一般大学及び師範学校の如き権威ある教育機関」の中で実施する必要があった。そこで廣池は、私塾

から専門学校令による学校への移行を行うと同時に、さらにその先を見据え、「モラロジー大学」設立の構想を打ち立てた<sup>注1</sup>。「モラロジー大学」そのものは実現しなかったものの、この学祖の高邁な理想はその後も受け継がれ、一九五九年（昭和三十四年）に麗澤大学の開学として現実化する。

開学当初の麗澤大学は「外国語学部」（イギリス語学科、ドイツ語学科、一年遅れて中国語学科）だけの単科大学であった。外国語学部としたのは、当時の日本が、敗戦によって領土と資源の四割を失い、年々百万人以上も人口が増加する状況にあって、ど

うしても海外への展開に活路を見出す以外、生きる道がないという厳しい社会状況があったからだ。すなわち、国家の後ろ盾がない中で日本人が世界に貢献するには、グローバル・リテラシーに裏付けられた学識と、世界の人々から信頼される品性が不可欠だと考えたのである。

麗澤大学開学式では、初代学長の廣池千英が、麗澤教育の特徴をいみじくもつぎのように述べている。「そもそも教育というものは、人間の心に仁愛の精神を植えつけますところの最高の理想であると私は信じておりますものでございます。この精神の上に現代の科学と知識とを植えつけて、これを応用してこそはじめて学問というものの光が出てまいるものでございます」。この「知徳一体」の思想は、開学以来の麗澤の道統および学統として、今でも大学教育の中心で息づいている。

廣池千九郎は「徳を尊ぶこと学、知、金、権より大なり」という格言も残している。私たちの人生の基本となる軸足は、社会で手に入れようとして努力

する学問、知識、金力、権力などの諸力よりも、人間の道徳性もしくは品性に置くべきであって、それらの諸力は、道徳的な基礎があつてはじめて意味をもつという考え方である。

いうまでもなく、国立大学と私立大学の一番の違いは、建学の精神の有無であると思われる。この建学の精神こそ、私立の私立たる所以であり、それが形骸化することは、とりもなおさず私立大学の存在意義そのものを喪失するに等しいといつても過言ではない。モラロジーに基づく道徳教育は、麗澤教育の始まりでもあり、終わりでもある。この点だけは、時代がどのように変化しようとも揺らがず、また動じることがない。

#### 麗澤大学における道徳教育の現状

では、麗澤の建学の精神が、現在の大学のカリキュラムでどのように展開されているかを管見してみよう。紙面の関係上、その骨子だけを述べることにする。麗澤の道徳・倫理教育は、①人格形成教育、

②多文化理解教育、③専門倫理教育の三つの柱で構成されている。

まず、人格形成教育の中核を担う科目は「道徳科学A・B」であり、両学部<sup>注1</sup>の教養科目のコアとして位置づけることができよう。「道徳科学」の教育内容は、①麗澤大学で学ぶ意義を自覚する ②専門的な知識や技術を活かす上での品性や道徳の必要性を学ぶ ③現代人特有の心の痛みや苦悩と正面から向き合う ④地球環境全体の問題を道徳的な視点から分析し解決に取り組むスキルを習得する ⑤民族・宗教の対立が絶えない国際社会において多元的な価値を容認するための「寛容」と「互敬」の精神<sup>注2</sup>を養成する、などのコンテンツで構成されている。

「国際的教養人」の養成を目標とする外国語学部では、文化を相対的に理解することを目指して、多文化理解教育を展開している。具体的にいえば、①教養教育の中核に「人類の共存と異文化理解に関する科目」を位置づけ、②専門教育では、四学科の言語研究・地域研究に加えて、「比較文化研究コー

ス」・「国際関係研究コース」(学科共通)を配置することで、民族・宗教・文化の多様性に対する理解を深め、国際交流に寄与する人材の育成を目指し、③「比較文明文化研究センター」<sup>注3</sup>と「言語研究センター」<sup>注4</sup>による多言語・多文化理解教育の支援を行っている。

「国際公共人」の養成を目標に掲げる国際経済学部の専門倫理教育では、①「ビジネス・エシックス」(同学部三年次専門科目)と「情報倫理」(国際産業情報学科一年次必修科目)を専門科目に位置づけ、②生命・医学倫理、科学・技術倫理<sup>注5</sup>、環境倫理、政治倫理など学際科目関連のカリキュラム整備に力を注ぎ、③「企業倫理研究センター」<sup>注6</sup>や「経済社会総合研究センター」<sup>注7</sup>による道徳・倫理教育の支援を行っている。

この他にも、両学部共通科目として「比較文化論」や「異文化研究」などの多文化理解に関する科目、「ボランティア論」「生命科学」「環境科学」などの現代的道徳や倫理問題に関する科目が配置されている。

## 全学委員会による道德教育支援

麗澤の道德教育支援はカリキュラムだけにとどまらず、大学の教職員から構成される全学委員会レベルでもバックアップを行っている。まず「道德科学教育委員会」は、①「道德科学」の導入パンフレットである『建学の精神／道德科学』を毎年更新作成して授業のねらいと意義について学生の理解を促し、②「道德科学」の意義を共有化して意見聴取のツールとするため、同パンフを全教職員および後援会総会参加の保護者に配布し、③月一回の頻度で開催する「道德科学教育会議」をFDの場として活用し、担当者の授業内容や教授方法等の相互紹介と意見交換を行っている。

「編集委員会」は、本論も収載されている『麗澤教育』<sup>注8</sup>を発行し、本学の人格形成教育について、学生、教職員、課外活動指導者、保護者、卒業生などが、それぞれに活動内容や現状を報告し、麗澤の教育について相互理解を深める場を提供している。

## 新入生に対する建学の精神の導入教育

外国語学部では毎年新入生を対象に「谷川オリエンテーション・キャンプ」を行っている。開催場所の谷川セミナーハウスは、一九三七年（昭和十二年）、創立者の廣池が群馬県みなかみ町谷川に私財を投じて温泉を購入し、開設した教育施設である。病弱であった廣池は療養をかねて全国九十余の温泉を巡り、その中でも谷川温泉が最上のものであると判断し、ここに麗澤の関係者の精神と肉体をあわせ救う施設を建設した。したがって、この地を訪れること自体が、創立者の精神の遍歴を知る機会となる。谷川では、職員により谷川での創立者の活動が紹介され、最晩年の仕事部屋のある大穴記念館を訪問する。大穴記念館でのプログラムを担当するのは、本学の「道德科学」担当教員と上級生からなる「チーム道德科学」である。上級生スタッフと同行職員は、創立者に関する事前勉強会を開き、スタッフ自身の勉強の機会にもなるよう心がけている。

国際経済学部も以前は外国語学部と同様に谷川校

外授業を実施した経緯があるが、その後、学部独自のカリキュラム上の必要性もあって、その内容は質量ともに正規の授業とするに十分値するとの判断から、一九九九年（平成十一年）から「社会科学分析入門」（基礎・学際科目、二単位）として、カリキュラム上に明確に位置づけるに至った。建学の精神を教えるプログラムは講義形式でなされ、たとえば同年四月五日（木）～七日（土）に実施された三日間にわたる「社会科学分析入門」では、一日目に学部長講話の後、自校史教育として、「道徳科学」担当教員により「麗澤大学創立者・廣池千九郎と建学の精神」と題する講義が行われている。

### カリキュラム以外での道徳教育の実践的取組

「モラロジー大学」の構想の中で、廣池千九郎は本学の寮制度を「大学の日課以上の重要事」であり「学生品性陶冶の根本原理の淵源するところ」と位置づけている。本学では一九三五年の創立時から全寮制を採用し、「自修研鑽の実力」を養う教育寮を中心

に学生支援が行われてきた。一九八六年から通学制を導入することとなったものの、現在の寮も教育寮としての位置づけに変化はなく、学生の寮長による自治寮体制を維持している。大学では、全学レベルで学生支援を担当する学長補佐と学生課学寮担当を中心に、寮長の種々の悩みの解決や人間の成長を促進する目的で「寮長セミナー」<sup>注9)</sup>を実施してきた。

それと同時に、寮以外の場での学生支援として実施されているのが、学内の全課外活動（クラブ・同好会）のヘッドを対象とし、他者への奉仕を通して自己の人格的研鑽を目指す「リーダーセミナー」<sup>注10)</sup>である。今後は、①「寮長セミナー」と「リーダーセミナー」の拡大充実 ②「リーダー支援」に軸足を置いた全学的学生支援体制の構築 ③生涯教育の視点を踏まえた他の学生支援とのコラボレーションを実施する予定である。

この他にも、社会奉仕活動として、近隣地域の小中学校のネットワーク整備のために設立されたNPO法人柏インターネットユニオン（略称KIU）の

活動への国際経済学部国際産業情報学科学生の参加（平成十二年 柏市教育功労賞を受賞）、留学生の多くが協力する地域の小中学校の国際理解教育、「ボランティア論」（例年百五十名程度の学生が履修）の実践的展開、留学生による国際交流活動<sup>注1</sup>、外国語学部竹原茂教授主宰の国際理解のための実践教育である「タイ・スタディー・ツアー」、RIFA（麗澤国際交流親睦会）という学生の外国人留学生支援サークル活動など多種多様な事例があるが、紙面の関係上、これらの活動の紹介についてはまたの機会に譲りたい。

学部改組と「道德科学教育センター」の発足による道德教育の新たな展開

麗澤大学は、新しい時代に対応すべく、全学をあげて抜本的な教育システムの改革を推進している。二〇〇八年四月には、両学部を改組し、外国語学部は、従来の英・独・中・日の四学科体制から外国語学科の一学科に、国際経済学部は経済学部と改称し、

産業情報学科を廃止して、経済学科と経営学科の二学科にして新たなスタートを切ることになる（詳しくは麗澤大学のHP上にある「二〇〇八年四月 新たな学びがスタート」をクリックしてください）。それに伴い、麗澤大学の道德教育も、「モラロジー大学」構想の現代的展開を図りつつ、さらなる充実を目指したいと考えている。

両学部ともすでにカリキュラム改革を行い、外国語学部では、①自校史を学び、麗澤のアイデンティティを確立するための副専攻コースとして「二十一世紀の人間学」を新設し、②「道德科学A・B」の上級編として「生涯学習論」を設置する。経済学部では、①「モラル」「IT」「グローバル」を、専門教育を貫く三つの横軸として位置付け、全コースに「社会貢献」「コンプライアンス」など、倫理と公共性の視点を盛り込み、②企業倫理、コンプライアンス、CSR（企業の社会的責任）、会社法、知財法、リスク管理について学ぶ「企業法務コース」を設置する。

さらに平成二十一年に開学五十周年を迎える麗澤大学は、この記念事業の一環として、麗澤における道徳教育の再構築を行うための全学的な組織づくりに着手したいと考えている。その受け皿としては、「新しいワインは新しい革袋に」というように、「道徳科学教育センター」を新設する予定である。センターでは、①本学における教育活動全般における「建学の理念」の位置づけを明確にする、②道徳科学（モラロジー）に関する教育と研究を行うことを基本方針とする。活動内容は「教育活動」として、①「道徳科学」の授業運営支援および教材開発、②道徳教育の展開の場としての学生支援活動、「研究活動」として、①建学の理念に関する研究とその教授法の開発、②道徳科学（モラロジー）に関する研究とその教授法の開発、③倫理学、道徳思想に関する研究とその教授法の開発を計画している。

「日々に孜孜、日に新たなり」、麗澤の挑戦はとどまることがない。

## 〈注〉

1 「モラロジー大学（Morality University）設立の理由書」（一九二八年）参照。

2 一年次必修科目四単位、日本人学生と留学生が共に履修する。担当教員は二学部で合計十名で、外国語学部六クラス（約六十名ずつ）、国際経済学部九クラス（約四十名ずつ）が設置されている。

3 価値相対主義や価値多元主義が叫ばれる現代では、共通の道徳観や倫理観の形成は難しいとの意見がある。しかし「道徳科学」では、人間各人の人格の中心的価値、各種コミュニケーションの中心的価値では合意形成が可能であり、人類が共有できるコモン・モラリティの探求が不可欠であるという信念で教育に携わっている。具体的なテーマとしては、「成熟社会の課題―他者をケアするモラル」「いのちを見つめる」「自己の存在確認と自己を生かす生き方」「モラロジーから見た人間の生き方」「アイデンティティの探究」「現代社会とモラル」「ホモ・パティエンス」（苦の人間観）について考える」「日本文化におけるモラル」「先人の生き方に学ぶ」「文化と倫理」「総合的な人間学としての道徳」「アイデンティティ確立の問題」「道徳の基礎論・実践論」「自分の生き方と道徳」「現代社会が直面する倫理道徳的課題」「現代社会の諸問題と倫理・道徳」などがある。

4 一九九五年に設置され、世界諸文明・文化の特性を探求するとともに、相互理解の基盤となる人類共有の道徳・倫理の研究にも力を注いでいる。



5 二〇〇三年十月に設立され、言語教育に伝統と実績を有する麗澤大学の研究水準の高度化と、個々の語学の枠を超えた横の連携、および学部と大学院の縦の連携を担う教育支援を行う。

6 二〇〇一年に設置され、行政の審議会や民間の企業、研究機関等と連携しながら、企業経営をめぐる倫理問題の解決に指導的な役割を果たしている。

7 一九九八年に設置され、経済・経営・情報分野における専門知識を総合的に活用する努力を継続する。

8 一九九五年より年一回発行の雑誌。

9 開学三年目の昭和三十六年から毎年一回実施。対象は、新任の寮長全員、現寮長の有志で、場所は谷川セミナーハウスを利用し、二泊三日の合宿形式をとる。

10 開学三年目の昭和三十六年から毎年一回実施。対象は大学内の全ての課外活動の部長やサークルの代表、それに学友会の主要メンバー、大学祭実行委員会の主要メンバー、等約五十名。場所は谷川セミナーハウスで、二泊三日の合宿形式をとる。

11 約三十名の麗澤大学留学生が、自国の文化の紹介など、下表のような地域との交流に参加している。

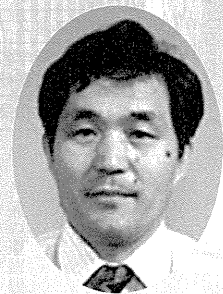
### 〈留学生による国際交流活動〉

主催者	交流の名称	参加者数
モラロジー研究所	「心のふるさと学級」 (小学生対象)	12
柏ユネスコ少年団	留学生との交流会	5
千葉県高等学校教育研究会 国際教育研究部会	高校生夏季 国際理解セミナー	3
柏市立柏高等学校	異文化理解講座	3

# 外国語学部の改組と

## 新カリキュラムの特徴

外国語学部学部長 奥野保明



外国語学部は平成二十年度より「より自由で方向性のある学び」を提供し、全教員が全学部生の教育により深く関わる仕組みを作るために、四学科から一学科制に移行する。生きた語学力の修得と少人数教育による面倒見の良さなど、これまでの長所と実践を発展させ、より効果的な教育プログラムを整えようとするものである。

### 一、教育研究上の理念・目的

(文部科学省への届出書を中心に)

これまでの外国語学部は、英語・ドイツ語・中国

語・日本語の言語名を冠した四学科で構成され、研究対象とする学問分野は、それぞれの語学・文学および地域社会・文化、言語学であった。一・二年次の専攻言語インテンシヴ・プログラムによって、語学力向上に然るべき成果を上げ、三・四年次においては、専攻言語や地域研究の枠を越えて、比較文化や国際関係科目を専門的に学習できるようなコースを設定し、より幅広い学習が可能となるよう工夫してきた。

しかし、近年のグローバル化によって、大学教育における多言語・多文化社会への対応がよりいっそ

う求められるようになり、言語・地域の枠を取り払う必要を生じさせている。また各学問分野における教育研究対象の増加は、学問分野の専門化や細分化を引き起こして学科の細分化が進んだが、その結果ともすれば学生の受ける教育内容が狭い分野に限定される傾向が生じて来ている。グローバル化とポータル化が様々な学問分野で進行している現在、共同して取り組むべき複合領域が多くなっており、学部教育においては、特定分野における完成教育というよりも、大学院や生涯学習への展開を見据えた、より普遍的な基礎教育をしっかりと提供することが求められている。

そこで、今回設置する外国語学科は、これまでの言語による学科分立制を改めて一学科とし、現代社会で求められているグローバル化を視野に入れた外国語修得と、学んだ語学力を活かしてそれぞれの関心に沿った専門研究を行うことができるようなシステムを構築することを目的としている。つまり学生に専門の骨格を正確に理解させると同時に、学生が

幅広い視野を持ち、学問を総合的に把握し、課題を探求できるような幅広い教育を提供するのである。従来は、言語名に隠れていたきらいのあるコミュニケーションや国際交流・国際協力といった内容的な学習分野をも表に出し、一学科内に次の六つの主攻を置いた。

- ①英語コミュニケーション専攻、②英語・英米文化専攻、③国際交流・国際協力専攻、④ドイツ語・ドイツ文化専攻、⑤中国語・中国文化専攻、⑥日本語・日本文化専攻。

## 二、主専攻の目的と特色

英語学科を「英語コミュニケーション専攻」と「英語・英米文化専攻」に二分してそれぞれの専攻に専門性と特色を持たせたこと、そして語学と行動力を生かして実践的に活動しようとする「国際交流・国際協力専攻」を新たに設置したこと、ドイツ語学科・中国語学科・日本語学科はこれまでの留学・海外教育実習も取り入れた実践的語学教育・理論教育

に、EU圏あるいは東アジアの社会と文化も研究対象に加えたこと、などが主たる変更点である。次に、各専攻の目的と特色を紹介しておこう。

### ① 英語コミュニケーション専攻

英語による総合的コミュニケーション力を徹底的に高め、英語で情報発信する力を養うのが目的であり、「英語学」「コミュニケーション学」「英語教育」を三つの柱にしている。大学院の英語教育専攻のカリキュラムと連携しながら、英語的な表現、英語圏の人々の論理、より専門的な語彙と文法などを学ぶ。必修科目の「Discussion on Culture & Society」「Reading Workshop」など英語演習科目のほとんどが英語のみで展開される。また「コミュニケーション論」「英語音声学」「英語教材作成法」「口頭翻訳」その他、英語教員あるいは英語通訳をめざす者の必須科目が揃っている。

### ② 英語・英米文化専攻

英米を中心とした英語圏の社会・文化・言語を理解すると同時に、多文化社会における文化発信力を養うのが目的であり、「英語」「文学・文化研究」「地域研究」を三つの柱にしている。専攻独自の科目として「Study Skills」「Academic Presentation」等、英語情報を入手し、把握し、それを提示することに重点をおく授業と、「Readings in Culture and Society」のように、海外文化・社会の把握をテーマとした授業が展開される。また「英米文学・文化」「アメリカの歴史と現在」「コモンウェルス諸国の社会」その他、英語と英語圏の多様性について学ぶ科目が提供される。

### ③ 国際交流・国際協力専攻

英語に加えて英米圏以外の言語も重視し、国際貢献を実践する異文化コーディネーターを養成するのが目的であり、カリキュラムを貫く三つのコンセプトとして「多文化との共生」「頭と体を使った実践活動」「人間理解と文化理解」を掲げている。「グロー

バル英語」や「第二外国語特別演習」によってサバ  
イバルのための語学力を身につけ、「国際協力」「国  
際ボランティア論」「ソーシャルワーク」「海外ボラ  
ンティア実習」その他、国際NPO／NGO、企業  
の海外事業担当や地方公共団体における国際化の推  
進に必要な能力を養う専門科目が揃っている。

#### ④ ドイツ語・ドイツ文化専攻

国際共通語としての英語と情報発信できる実践的  
なドイツ語力を身につけると同時に、ドイツを中心  
としたEU文化圏の言語、文化、社会、歴史につい  
ての理解を深め、日本やアメリカとは違う視点を養  
うのが目的である。〈ドイツ語基礎演習〉のインテン  
シヴ・プログラムによって、各種検定試験合格レベ  
ルにまで語学力を伸ばし、二年後期からのドイツ留  
学に備える。三・四年では、「ドイツ語ワークシヨッ  
プ」「日独比較文化セミナー」「ドイツ語圏事情セミ  
ナー」「現代ヨーロッパ社会研究」「ヨーロッパ地域  
観光論」その他、ドイツ語を更に磨き、ドイツとE

U文化圏を研究する科目を揃えている。

#### ⑤ 中国語・中国文化専攻

将来の東アジア関係を視野に入れ、ビジネスでも  
役立つ実践的な中国語力を生かして、幅広い分野で、  
将来の日中関係を担う人材を育成するのが目的であ  
る。〈中国語基礎演習〉のインテンシヴ・プログラム  
によって、各種検定試験合格レベルにまで語学力を  
伸ばし、二年後期からの中国語圏留学に備える。  
三・四年では、「ビジネス中国語」「広東語」「中国文  
学演習」「中国政経研究」「中国歴史研究」その他、  
中国語を更に磨く演習科目と中国の社会・文化・歴  
史を研究する科目を揃えている。

#### ⑥ 日本語・日本文化専攻

留学生とのコラボレーション、日本語と他の言語  
との比較対照を通じて、柔軟な思考と日本文化発信  
力を養うのが目的であり、「日本語学・言語学」「日  
本語教育」「日本文化」を三つの柱としている。言語

学を中心とする基礎となる理論を重視すると同時に、「日本語学入門」「日本語教育入門」「日本語の歴史」その他、日本語教員をめざす者の必須科目に加え、「日英」「日中」「日韓」「日タイ」「日独」の対照言語研究科目を揃えている。様々な国からの留学生と日本人学生が共に学ぶ環境で、日本文化に迫ろうというカリキュラムである。

### 三、副専攻の名称と目的

今回の外国語学科への改組の主眼は、グローバル化、ボーダレス化する世界に対応して、専攻言語別による学科の枠を取り払って学生に幅広い視野を持たせ、総合的な教養を身につけさせることにある。そのために導入したのが副専攻の制度であり、以下の十コースによって構成される。学生は専攻言語と副専攻（選択必修）を同時に履修することにより、語学を活かし、かつ職業の基盤となる教養を身につけることができる仕組みである。それぞれの名称と目的は以下の通りである。

① 英語教育・英語教育に関する科目群で構成され、英語教員の道をめざす者を育成する。

② 日本語教育・国語教育・日本語教育・国語教育に関する科目群で構成され、日本語・国語教員をめざす者を育成する。

③ 言語・情報コミュニケーション..主張、アイディア、見解、意見などを発信するための言語・情報技術を身につけさせる。

④ EU地域・ドイツを中心に、ヨーロッパの社会的・文化的背景について理解を深める。

⑤ 英語圏地域・欧米の枠組を超えたグローバルな英語使用地域の社会・文化的背景についての理解を深める。

⑥ 東アジア地域・日本・中国・韓国を中心に、東アジア地域の社会・文化的背景についての理解を深める。

⑦ 比較文化・比較文明..国の内外の諸文化を相対的にとらえ、文化のコーディネーターをめざす者を育成する。

- ⑧ 国際交流・語学力を活かし、異文化コミュニケーションのコーディネーターをめざす者を育成する。
- ⑨ ビジネス・語学に強いビジネスパーソンを育成する。
- ⑩ 二十一世紀の人間学・現代社会に求められる倫理について幅広く学ぶ。

#### 四、まとめ

前記の（主専攻（五十四単位）と（副専攻（二十四単位））及び「専門ゼミ」と「卒業研究」を中核として、「外国語科目」「基礎ゼミ」「コンピュータ・リテラシー」「道徳科学」等の必修科目、「教養ゼミ」をはじめとする多岐にわたる教養・共通選択科目、さらには海外語学研修・海外ボランティア実習・クロス留学等を組み込んだ外国語学部のカリキュラム体系は、多言語・多文化の視点から現代社会を理解し、共生社会の実現に寄与する国際的教養人を育成しようとするものである。



留学生と共に体験するドイツ料理

## 国際公共人をめざして

### 新たな経済学部の出発

経済学部学部長 高辻 秀興



一、なぜ新たな経済学部が必要か

国際性と倫理性を備え国際社会に貢献し得る人材（国際公共人）を育成することを目的に平成四年に国際経済学部が設置された。当初は国際経済学科・国際経営学科の二学科から成っていたが、平成十一年に経済（マクロ）・経営（ミクロ）の中間としての産業（セミマクロ）のレベルで広く情報技術を活用できる人材を育成することを目指して国際産業情報学科が設置された。その後の社会情勢の変化の過程で次の諸点が課題として指摘されるようになった。

第一に、国際性と倫理性を備えた人材の育成とい

う点では一定の成果を取ってきたが、もう一段高い目標である「我が国の国際競争力の増強と国際貢献でのリーダーシップを担う人材の育成」という面で十分に目標を達成できなかった。有望な学生の能力開発へ向けて適切な教育プログラムを整備する必要があった。

第二に、一方で社会の多様な要求と学生の基礎的能力開発への対処である。卒業生の多くが国際舞台で活躍するわけではなく大半は国内で活躍している。その場合、広い意味で国際的視野を有するのはあらゆる人材育成における今日的な共通課題だとしても、



現実に社会人として一步を踏み出す段階ではやはり経済人・経営人としての基礎的能力を習得しておくことが重要である。つまり経済・経営の分野での学部教育の射程を基礎的専門力の涵養として手堅く位置づけて教育プログラムを再整備する必要があった。

第三に、情報技術教育の位置づけの見直しである。国際産業情報学科は、もとより情報技術の開発研究教育を目的としたものではなく、情報技術を社会活動や経営活動に活かすことを目的としたものであった。しかし独立した学科としたことで、背景となる経済・経営の教育が薄くなった。改めて経済・経営の教育の中に位置づけて再整備する必要があった。

## 二、経済学部理念と概要

これらの課題に応えるために国際経済学部を廃止し、平成二十年四月一日から新たに経済学部を設置することにした。国際の冠をはずしたのは国際性に関わる教育を廃するのではない。むしろ本学の建学の精神である国際人の養成ということがあらゆる教育の面に共通しているので、あえて特記することを

廃するというに過ぎない。新たな経済学部は、これまでの理念を引き継ぎ「国際性と倫理性を備え国際社会に貢献し得る人材（国際公共人）を育成する」という理念のもとで、学部教育の内容として経済学・経営学に関する基礎的専門力の涵養を目的とするものである。なお従来の国際経済学部は直ちに廃止するのではなく学生が全員卒業した時点で廃止することになる。

新たな経済学部は一学年の定員が三百名で、経済学科（定員百七十名）と経営学科（定員百三十名）の二学科から成る。経済学科と経営学科にはそれぞれ五つの専門コースを設けている。またそれらとは別に四つの特別コースを設けている。以下その特色を挙げていく。

## 三、経済学部の教育の特色（表1）

### (1) 基礎的専門教育の充実

経済学科に①理論・計量、②経済政策、③ファイナンス、④公共政策、⑤国際社会の五つの専門コー

スを設けた。また経営学科に①戦略・マーケティング、②組織・人事、③会計・税務、④経営情報、⑤企業法務の五つの専門コースを設けた。これらはコースと称しているが堅い縦割りのコースではない。社会の多様な要請に応じて基礎的専門力を涵養するための履修モデルである。これにより専門科目を系統的に学ぶことができ、目指す人材像への道のりが明確なものになると期待している。また両学科のかなりの数の科目を相互に履修することができるようにし、経済・経営の融合を実現している。なお基礎的専門教育の成果の一つは卒業論文を仕上げることにある。そのため専任教員のほとんどが専門ゼミナールを開講し三年次生から受け入れる体制をとっている。

### (2) さらに高度な専門教育

さらに基礎的専門力の上に立って本格的な専門職を目指す人材の育成のため、REPL (Reitaku Educational Program for Professional License) コースを設けている。これは税理士または公務員を目指す

す二つの特別コースである。それぞれ一学年約二十名の学生からなる選抜制コースである。税理士についてはすでに平成十七年度から開始しており、税理士の資格試験科目で毎年数名の合格者を出すなどの実績がある。将来的にはさらに他の分野の専門職コースも増設していきたい。

### (3) 国際性教育の充実

国際性に関わる教育を充実させるため国際社会コースを設けた。これは経済学科の専門コースに位置づけているが経営学科からでも履修可能である。普通は一般教養と見られがちだが、ここでは専門領域として位置づけている。それは、経済学・経営学の方法論を習得していく一方でその対比において国際社会のあり様をつかむ方法論がより明確になると考えたからである。なお国際性教育のリテラシー部分である英語教育については、これまでの少人数で密度の高い授業形態を引き継ぎ四年間を通じて学べる環境を整えている。

### (4) さらに高度な国際ビジネスリーダーシップ育成

さらに高度な国際性教育として、国際ビジネスリーダーシップを育成するための特別コースを設けている。IMC (International Management & Communication Course) と中国MC (China Management & Communication Course) である。これは単に英語や中国語を学ぶのではなく、英語や中国語を活用して経済学・経営学の専門的内容を学ぶ点に最大の特徴がある。それぞれ一学年十〜三十名の選抜制コースである。海外提携校への留学を積極的に支援することになっている。

#### (5) 倫理教育と社会的ルール設計の視点

習得した専門的知識や方法を社会で正しく活かす資質（知徳一体）の涵養をねらいとして、倫理教育を充実させている。これは本学全体の教育の柱でもある。道徳科学、経済倫理、ビジネス・エシックス、情報倫理などがそのための基礎を培う科目である。しかし一方、個々の主体の利害の対立が輻輳する今日の複雑な社会では、個々人の倫理的資質を涵養するだけではなく、行動規範を一定の社会的ルールと

して結実させる必要がある。経済学部の倫理教育の固有性はそこにある。つまり社会的ルールの設計とともにコンプライアンスの確立を担う人材の育成が最大のねらいである。そこで経営学科に企業法務コースを設け、より専門的にこうした領域の教育を行うことにした。

#### (6) 情報教育の充実

経営活動における情報システムの活用に関する教育を行うことを目的に経営情報コースを設けた。経営的意思決定への活用、インターネット・ビジネスへの活用、コンピュータ・ネットワーク技術、プログラミング、データベース構築などを内容としている。これらをもとに情報処理技術者の資格や教科「情報」の教員資格が取得できる。一方経済学・経営学の専門科目では積極的にコンピュータインテグ志向の教育方法をとっている。統計学、計量経済学、ファイナンス工学、社会情報システム、環境情報システム、ビジネスゲーム、意思決定科学などの科目ではコンピュータを活用した実践的な教育内容。

#### (7) 問題解決型教育の工夫

専門的知識や方法論を個別に習得するだけでは、経済人・経営人としての基礎的専門力が涵養されたとはいえない。それを実際に活用してみようやく知識と方法の実践的有機的な連結が可能となる。そのため少人数のクラス編成で四年間を通じて問題解決型教育ができるように工夫した。社会科学分析入門、入門ゼミナール、専門基礎演習、専門ゼミナールなどの科目がそれを担っている。例えば経営学科ではビジネスゲームを導入して実践的な経営プロセスを模擬体験しながら専門知識と論理的思考とを習得する。また企業実習という科目では学生が企業に出勤して実習する形態をとる。これは本学部と企業とが共同で開発した問題解決型実習プログラムである。単に企業内の定型業務を体験するのではなく、企業が抱える問題の解決に関わったり、人材開発プログラムの試行に関わったりすることで、総合的な問題解決力の基礎を築く。

#### 四、今後の課題と進化するカリキュラム

カリキュラムの上で今後強化したい分野は多い。現時点では特にファイナンスと倫理教育の可能性を挙げておく。ファイナンスはお金の流通だけでなく今日ではリスクの流通を扱っている。金融工学はいまや特殊な計量分析の技術を提供するだけでなく、我々が不確実な将来へ向けてどのように行動すればよいかを論理的に考察するための方法になっている。一方倫理教育の眼目はルール設計である。経済学は効率的な資源分配を探究するが、それを可能にするのは権利と責任の適切な配分様式である。今日の「法と経済学」は、権利と責任の配分に関するルールの設計に有用な方法論を提供してくれる。善意の人が集まっても事故は起きる。最安値リスク回避者が責任を負うべくルール設計せよという考え方はファイナンスと倫理社会に共通する原理の一つである。社会科学の領域は細分化と融合とを繰り返している。今後の学部教育はそうした果実を取り込みながら進化していかねばならない。それには我々教員もまた進化しなければならぬ。

**表1 経済学部の構成(10の専門コースと4つの特別コース)**

学科	専門コース	どんなことを学ぶか	どのような人材を育成するか
経済学 科	理論・計量	経済理論の構築と実証の方法を学ぶ。	大学院への進学,シンクタンクでの研究者,経済系の公務員,その他エコノミスト。
	経済政策	景気,雇用,金融,為替,年金などの経済問題と経済政策について学ぶ。	経済政策を立案するエコノミスト,経済情勢を読み取り戦略的決定のできる企業人。
	ファイナンス	資産価値評価と資産選択,投資のリスク評価,派生商品の理論など,金融工学を学ぶ。	大学院への進学,企業の財務部門やプロジェクト評価のエキスパート,証券アナリスト,アクチュアリ。
	公共政策	都市・地域・環境問題に対する政策科学的なアプローチを学ぶ。	シンクタンクでの研究者,公的機関の政策立案担当者,まちづくりNPOや環境NPOの担当者。
	国際社会	開発経済,地域研究,比較文明・文化論など国際的視野から国際社会の成立を学ぶ。	国際機関の職員,公的機関の国際交流担当者,途上国の開発支援担当者,企業の国際部門担当者。
経営学 科	戦略・マーケティング	消費者のニーズと信頼に応える経営戦略・マーケティングの理論と実践を学ぶ。	企業の企画・営業部門のスタッフ,中小企業の後継者,起業家,経営コンサルタント。
	組織・人事	企業組織の構成とガバナンス,組織の活性化,人事管理・人材開発について学ぶ。	企業の総務・人事など管理部門のスタッフ,経営コンサルタント,人材開発コンサルタント。
	会計・税務	企業における会計と税務の仕組み,意義,役割について学ぶ。	大学院への進学,財務・経理スタッフ,経営コンサルタント,CSR会計担当者,企業価値評価のエキスパート。
	経営情報	経営活動における情報システムの活用について学ぶ。	企業の情報システム部門のスタッフ,SE,システムアドミニストレータ,ITコーディネータ。
	企業法務	企業倫理,コンプライアンス,CSR,会社法,知財法,リスク管理等を学ぶ。	大学院への進学,企業の総務スタッフ,ビジネスの現場でコンプライアンスやCSR活動を展開していく人材。
特別 コ ー ス	IMC	英語で経済・経営の専門領域を学び国際ビジネスリーダーシップを習得する。	我が国の国際競争力と国際貢献でのリーダーシップを担う人材となる。
	中国MC	中国語で経済・経営の専門領域を学び中国ビジネスリーダーシップを習得する。	我が国の国際競争力と国際貢献でのリーダーシップを担う人材となる。
	REPPL税理士	税理士の資格を得るための語領域を学ぶ。	大学院進学により税理士の資格を得る。公認会計士,中小企業診断士,フィナンシャルプランナーなどの専門家。
	REPPL公務員	幅広い教養科目と経済専門科目を学ぶ。	経済系での国家公務員,地方公務員,国税専門官,その他公的機関の職員。

(注) IMC:International Management & Communication Course(国際マネジメント・アンド・コミュニケーションコース)  
 中国MC:China Management & Communication Course(中国マネジメント・アンド・コミュニケーションコース)  
 REPPL:Reitaku Educational Program for Professional License(麗澤専門職教育コース)  
 CSR:Corporate Social Responsibility(企業の社会的責任)

## 〈特集〉 道德教育の現状と課題 ～道德科学の授業から～

各大学の個性や特色の明確化が求められる現代において、私立大学にとって特にその建学の精神や創立者の意志をいかに継承し、時代の要請に応えていくかということが重要な課題となっています。そこで今回は「知徳一体」の理念に基づく全人教育をかかげる本学の特色を明確にするため、本学独自の「道德教育の現状と課題」道德科学の授業から」を特集しました。

しかし、「道德科学」というに限られた教員による比較的地味な科目であり、学生間にあっても「道德科学」の授業が必ずしも理解されているわけではありません。そもそも道德教育ということについては十分な理解もなく、高圧的なお説教や宗教的な洗脳教育のようなイメージを抱いている学生も少なくないのが実情です。

このような中で「道德科学」の授業を担当する教員は、毎回工夫を凝らし、学生の関心を引き出そうと努力しています。そこで「道德科学」の授業を担当する教員の抱負と、その具体的な授業内容を紹介することにより、学生のみならず教職員全体に対して、本学における道德教育

の意義とその内容を知らせ、その理想を共有したいと考え、この特集を企画しました。この企画に対して、幸いにして四人の担当教員の協力を得ることができ、そのレポートを読むことによつて、本学の個性的な教育の一端を具体的な授業内容を通して知ることができると思われます。ご多用の中、貴重な報告を提出していただいたことに対して、心より感謝申し上げます。

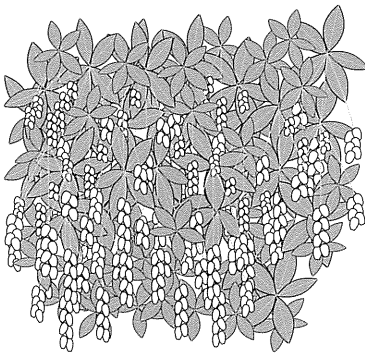
また、この特集の企画と同時に「道德科学教育センター」が開設され、「道德科学」に関する教育の拠点ができたことは、本学が道德教育に基づく人間作りに全学を挙げて取り組んでいるということを学内外に周知させることとなりました。このことによつて教職員間における「道德科学」に対する認識も深まり、道德教育を担当する教員の自覚も一層高まるものと考えられます。

外国語教育と道德教育を連動させ、経済と道德との一体を理念とする本学の教育は、流行語となった「社会人基礎力の養成」とか「人間力を身につける」ということばによつて表現されている現代的な教育の課題に対応する

ものであり、それはとりもなおさず本学に課せられた社会的な責任であると思います。よって、「道徳科学」に関する教育は決して座学として行われるのではなく、学生生活の全般を通して行われるものであり、学生支援として展開されるものと考えています。そのためには本学の教職員一人一人が建学の精神や創立者の遺志に対して関心を持ち、それらを共有することによって初めて本学独自の「師弟同学」の教育が成されるものと確信しています。

なお「道徳科学」に関する特集は既に「いまどき道徳？いまこそ道徳！」と題して本誌十号において企画されていますので、合わせてお読みいただきたいと思っています。

（出版委員会委員長 井出 元もと）



# 「道德科学」の授業——私の場合

外国語学部教授 岩佐信道



## 一、道德科学与道德科学の授業——私の理解

道德科学は、英語のモラル・サイエンスに当たるが、狭い意味では、本学の創立者廣池千九郎がモラル・サイエンスの一つの体系として確立しようとしたモラロジーをさすこともある。その場合、モラロジーとは、行為の形式よりも、行為の背後の精神作用に着目し、通常の道德と、人類の教師と呼ばれる人々の質の高い道德の實質を比較研究し、それぞれが、人間の幸福にどのような違いをもたらすかを明らかにしようとするモラル・サイエンスといえるであろう。

ところで、廣池千九郎がその大著『道德科学の論文』

(以下『論文』と略記)で明確にしたのは、人々の道德性もしくは品性の如何が、人間の幸福の最も大きな要因ということであった。廣池千九郎はこのことを「徳を尊ぶこと、学・知・金・権より大なり」と表現した。本学の教育理念である「知徳一体」もこれと深く関係している。大学では、各分野の専門知識を学生に授けるだけでなく、それら諸能力を社会でどう活用するかを決める道德性の涵養こそ最重要といっているのである。

廣池千九郎が『論文』において明らかにしたもう一つの点は、「相互扶助の原理」であった。それは、この宇宙のすべての存在、そして、地球上のすべての存在



は、一つのシステムとしてつながっているという事実である。一例をあげれば、動物と植物は酸素と二酸化炭素の交換で互いに依存しあっており、多くの生き物は食物連鎖で互いにつながっており、人間はそうした多くの生き物を糧として生きている。また人間同士は極めて複雑な相互依存関係にある、といったことである。私たちが、人間のモラルを考える場合、この「相互扶助の原理」こそ、最も基本的な拠り所といえるのである。

DNAや生態学的研究の進展により、森羅万象の連絡がますます明確になる一方、地球環境の危機的な状況の中、人間は地球上の運命共同体の一員としての自覚が求められている。「相互扶助の原理」は今日一層重要性を増している。日本社会では、モラルの崩壊が進み、規範意識と法令遵守の強化が叫ばれているが、こうした諸問題に対処する基本は、対症療法ではなく、失われた絆の回復、すなわち、心のつながりの回復である。

このような観点から、私は、道徳科学の授業の「題

目」を「モラロジーから見た人間の生き方」とし、その「目標」は「人間は相互依存と相互扶助の複雑な網目（ネットワーク）の中で生きている。そのような人間の生き方に関する学問的考察としての道徳科学を、本学の創立者廣池千九郎が提唱したモラロジーの所説を手がかりに検討する。特に、さまざまな存在とのつながりを豊かにし、そのつながりを広げていく生き方の探求に焦点を当てる」としている（二〇〇七年講義要綱参照）。以下、その内容を簡単に見ていこう。

## 二、実際の授業の展開と学生の受け止め方

### （一）一学期前半の導入的授業

① 子どもが生きた親を葬る慣習としてのモラルを考える

学生の間では、道徳について、「何が正しいか、何をすべきかわかっている」「わかりきったことを押しつけられるのはいやだ」との考えが少なくない。そこで、かつてある西洋人が南太平洋の島で目撃した特異な慣習を取り上げる。そこでは、一定の年齢に達した親の

息の根を止め、葬ることが子どもの務めと信じられていた。もし自分がその場にいたらどうするか、各自自分の考えをまとめた後、グループで話し合いをする。学生たちは、人命絶対視の風潮の中、このような慣習が存在したことに驚くが、多くは、「自分の考えを押しつけてはいけない」と相対主義的見解を表明する。

### ② 道徳科学のパンフレットを読む

道徳科学のパンフレットを六人ずつのグループで読む。その際、二人が全体の三分の一ずつ分担して読み、その内容と感想をグループで紹介しあう。学生は、後で分担箇所の内容を報告する必要から、自分の箇所を真剣に読む。このような方法で、パンフ全体の内容をつかむことができ、道徳科学を履修する意味もある程度理解する。

### ③ 新渡戸稲造博士と廣池千九郎

廣池千九郎の『論文』には新渡戸稲造博士が序文を書いている。国際連盟事務局次長を務めた新渡戸と廣池は、『論文』をきっかけに深く信頼しあい、戦争へと進んでいく当時の日本をともに平和へと導こうとした。

新渡戸のビデオや伝記、『論文』へ寄せた新渡戸の序文、廣池の日記など用い、廣池の実像に迫る。学生は、本学の創立者の先見の明と、旧五千円札の国際人新渡戸との親密な関係など認識を新たにする。

### ④ 廣池千九郎記念館見学

廣池千九郎記念講堂では、映像により、廣池が、学者として、社会救済家として、また教育者としての極めて大きな業績をあげたことを知る。また記念館の展示物をとおして、廣池の一生を具体的に実感し、大きな感動を覚える。留学生も「私は、麗澤大学をそれほど特別の大学とは思っていなかった。しかし、廣池千九郎先生のことを知り、中国に帰ったら、是非人々にこのことを伝えたいと思う」という趣旨の感想を書いている。

### ⑤ プリント「人生の諸要素」を用いての作業

健康、容貌、財産、友達など、手に入れたと思う項目十数個を重要度、自由度、努力度の観点から五段階評価する。続いて、十人前後のグループで結果を集計し、その結果を黒板に書いて、クラス全体の結果を

集計する。学生は、自分と同じ結果や全く異なる結果に一喜一憂するが、総じて、他の学生の価値観に直接ふれるこの作業に興味をもって取り組む。道徳性に関係する価値観、人間関係、人柄などの項目が、重要度、自由度、努力度において高くなることも多く、「徳を尊ぶこと、学・知・金・権より大なり」ということを考える機会にもなる。

⑥ 親への感謝の気持ちを具体的に表す

キャンパスで行われる「伝統の日感謝の集い」に関連した授業である。伝統とは、人間生活上大切な恩人の系列を意味する。授業では、その意義をいろいろな角度から取り上げ、最後に、「親もしくはそれに代わる人に感謝の気持ちを具体的に表す」という課題を出し、その内容、親の反応、自分の感想をレポートさせる。多くの学生は、普段はなかなかできないことに取り組むことで、親との心の絆が深まったことを心から喜ぶ。この内容は「大学生が親に感謝の気持ちを伝える意義」というテーマで学会発表し（日本教育心理学会第四十五回総会発表論文集、二〇〇三年）、麗澤教育十号（二

〇〇四年）で紹介した。

(二) 一学期後半の相互依存のネットワークに関する授業

① 広い視野から人間の生き方を考える

私たちは、自分に興味のあるものや、利害がかかわること以外にはほとんど注意を向けない。多くの場合「心そこにあらざれば、見れども見えず、聞けども聞かず」であることを、日常生活の中で見つめる。しかし、逆に広い視野からものごとを見つめれば、私たちは多くの存在に支えられ、生かされていることが見えてくる。これをさまざまな事例を用いて考える。

② 自然界における相互依存のネットワーク

自然界のいのちのつながりをさまざまな映像でとりあげる。たとえば、一部の川のサカナは海に下り、海の豊富な栄養を吸収して何倍も大きくなる。そして産卵のため、元の川に戻ってくるが、その過程で多くの生き物の餌食となり、陸上の生き物を支えている。また、川のサカナの多くは水生昆虫を食べ、その水生昆虫は川に落ちた森の木の葉を食べており、結局、サカ

ナは森に支えられる一方で、森に棲む鳥のえさになるなど、大きな命のつながりの中で生きている。このような事実を知った学生は、生物の一員としての人間の生き方を真剣に考える。

### ③ 大地の恵み

私たちが生きる上で必須の空気、水、食べ物などは、基本的に、太陽をはじめとする大自然の恵み、天地の恵みということが出来る。私たちが大自然の働きに支えられて生きている事実をあげ、またそうしたことを感謝的に受け止める人間社会の英知を紹介する。学生は、こうした事実をおして大地の恵みを極めて自然に受け容れる。

### ④ 人間社会における相互依存のネットワーク

社会的生物としての人間は、社会生活から大きな恩恵を受けている。しかし、災害で他の地域との交流が遮断され、ライフラインが断絶されたような場合を除いて、私たちは社会から受ける恩恵の大きさに気づかない。学生は、それまで考えたことのない見方を少しずつ受け容れる。

### ⑤ 相互依存関係の三つのレベル

私たちは、以上のような複雑な相互依存のネットワークの中で生きているが、その相互依存の関係には物理的、社会的（経済的）、精神的の三つのレベルが考えられるとの見方を示す。そして、心をもった人間としては、精神的なレベルでの相互依存関係こそが最も重要であるが、それは極めて不十分であることを実例や文献をおして考える。ここまでの理解は学生によってさまざまである。

### ⑥ 感謝の意義

心をもった人間として精神的なレベルでの相互依存の関係を充実させるうえで「感謝」の重要性を提起する。感謝の大切さを納得する学生は多いが、中には「感謝を押しつけられたくない」との反応も見受けられる。

### (三) 二学期前半の「自己中心的傾向」を見つめる授業

人間は、ものごとを相手や第三者の立場に立って考えることがなかなかできない。これを人間の自己中心的傾向と呼ぶことができるとすれば、これこそ現代社

会のさまざまな問題の根底に横たわっているものといえよう。そして、この自己中心的傾向をみつめ、その克服の努力こそ、諸問題の解決のカギと考えられる。

① いじめ、② 家族の崩壊、③ 環境問題、といった問題を、それぞれ一、二週間かけて具体的に考える。ほとんどの学生は、これらの問題の根底に人間の「自己中心的傾向」があるという考えに同意する。

#### (四) 二期後半における相互扶助の原理の展開

① あらためて支えられている恩恵を考える

一学期の「親に感謝の気持ちを表す」という課題のレポートの内容も紹介しながら、親の存在の重要性を扱う。親に対して強い不信任感を抱いていた学生が、教師の助言に従って感謝の気持ちを表し、それがきっかけで親子関係が極めて親密になり、大きな幸せをつかんだ事例の紹介などは学生の心を大きく動かす。

また私たちの社会生活において、国ほど重要なものはない。国とは、国民全体で構成する生活共同体であり、私たちが国から受ける恩恵は、それ以外の集団や

組織と比べものにならない。このことを事実にして考察する時、多くの学生は、国に対する態度を大きく転換させる。この点は「国家社会とのつながりの自覚を育む教育」というテーマで、学会誌に投稿した（日本道徳教育学会誌『道徳と教育』二〇〇六年）。

② ネットワークの一員として他を支える喜び

自分たちが、相互依存のネットワークの一員であるとの自覚が深まると、自分もまた他の役に立ちたいと考えるようになる。道徳とは、このような自覚と感謝の気持ちから自発的に行われるものである、ということや、他の役に立ち、他から感謝されることは人間にとって大きな生き甲斐であることなどを、さまざまな事例を通して考える。特にマザーテレサの生き方などには、多くの学生が心から感動を覚える。

③ ネットワークの一員の自覚を他と共有する意義

私たちは、互いに密接につながりあった存在であり、自分だけが幸せになることはできない。相互依存のネットワークの一員の自覚は、他に伝え、他と共有しながら、互いに高めあうことが大切であることを考える。

(五)自己中心的傾向の受け止め方に及ぼす授業の効果

私たち人間は、相互依存のネットワークの中で多くの存在に支えられて生きていることに焦点を当てた授業が、学生の基本的な人間観や道徳観に何らかの影響を及ぼすかどうかを確かめるため、次のような調査を試みた。

二学期、自己中心的傾向の表れとして一連の社会的諸問題の考察を終えた段階で、改めて、私たちが多くの存在に支えられていることを総括的に振り返ることにした。具体的には十月の終わりに、自分は、①大地、②人々、③社会、④国から、それぞれどのような恵みや恩恵を受けているか、具体的に列挙する作業に取り組んだ。この作業の後で、こうして「つながりや恩恵を感じることは、自己中心性を和らげることにつながると思うか」と尋ねたのである。その結果、五十四名中、四十五名、八五%（無回答三名をのぞけば、九〇%）が「そう思う」と答えた。

この結果を、そのような機会をもたなかった道徳科の他のクラスや他大学の一般学生の受け止め方と比

較することを試みた。そのために、人間の自己中心的傾向について、①現代社会の諸問題の根底には人間の自己中心的傾向があるとの考えを支持するかどうか。②人間の自己中心的傾向を和らげ、徐々に克服していくことは可能と思うかどうか。について尋ねる質問紙を作成し、麗澤大学および他大学の五クラスの学生、合計二百四十九人から回答を得た。これによると、ほぼ四人中三人が、「現代社会の諸問題の根底には人間の自己中心的傾向がある」と思うと答えた。しかし「人間の自己中心的傾向を和らげ、徐々に克服していくことは可能と思う」と答えた学生は、半数もしくはそれ以下であった。この結果については、日本教育心理学会で「自己中心的傾向の克服についての一考察」というテーマで発表したのが、相互依存のネットワークの中で多くの存在に支えられて生きていることに焦点を当てた授業は、学生の間観や道徳観あるいは道徳教育可能性についての受け止め方に少なからぬ影響があることが示唆されているように思われる。

# 生きる知恵の探究

## —道徳科学の教育目標

外国語学部教授

水野 治 太 郎



### 一、沿革

この科目は、いうまでもなく他の大学にはみられない本学独自のものです。昭和十年、麗澤大学の前身となる「道徳科学専攻塾」の発足以来、この科目がいわば建学の理念として位置づけられ、必修科目として、今日に至るまで七十二年間にわたって講義されてきたこととなります。

その中でも、私は本学で四十年間にわたってこの科目を担当してきましたので、本学の道徳科学教育の歴史の大半を担ってきたこととなります。改めてその担ってきた責任の大きさを再確認しました。

廣池千九郎博士自身が著述した大著『道徳科学の論文』は今日では全十冊になります。昭和三十四年に四年制大学に移行してからも、四年間必修科目として教育され、この大著述がテキストとして使用されていたのですが、履修科目が次第に増大するなかで整理が行われ、一年生のみ必修になってからは、簡単なテキストに切り替わり、今日に至っております。

私は、道徳科学の課題を扱う著書を数冊発行してきました。なかでも『ケアの人間学』『弱さにふれる教育』『成熟の思想』『心を癒す物語』等は直接建学の理念に

関わるものでしたので、テキストとして活用してきました。

この科目はどこから由来したのかといえば、十八世紀のスコットランドでのモラルサイエンスです。またその思想を受け継いだ進化的な倫理学です。それらは二十世紀初頭まで影響力をもっていた自然科学主義の潮流と深い関連性があります。しかしそれらの模倣というわけではなく、むしろ創立者の工夫があり、一言でいえば、学問研究に価値研究を導入した点、たとえば、人類の教師といわれる精神的指導者の示した倫理原則、自然と人間・社会・国際社会・地球上の自然環境問題にまで視野を拡大している総合性等、さらに、実践性という性格を備えたものです。従って学問自体が「知徳一体」になる性格を備えていたといえます。

## 二、道徳科学の理念とその現代化

この科目は当初から、国際平和を担う人材育成という使命をもっていました。太平洋戦争前夜にも関わらず、戦争に命を賭けるのではなく、平和に貢献する人

間が理想像でした。そのことは戦後も同様で、穏健なナショナルリズムと国際平和主義、その統合性、これが拠って立つ理念でした。戦争中にも、英語教育を中止しないで継続してきた国際感覚と、当時の学園長廣池千英校長は、一度も軍服を着用しなかった点を生涯最大の誇りにされていました。

このような伝統を継承しながらも、他方で、現代の大学教育の使命をそこに重ね合わせながら、私が目標として最大に意識して努めてきた点は、大学らしい知的探究の学として道徳科学を講義することでした。価値的メッセージ伝達に性急になると、イデオロギー教育になりがちです。そうではなく、まずは現実社会を正しく認識するとき、そこに高度文明ゆえに起こる画一主義・機械主義の蔓延と共に、あるいは自然の破壊・環境汚染に伴って生じる人間性の荒廃、非人間化現象が多方面で確認できます。

一例をあげれば、教育面では、高度専門教育だけが優先して、人としての教養が疎かになっていること。人間に対面し人間を深く理解する能力の低下。高度な



知識を道具にして欲望の拡大生産に努める、「理性の道具化」現象が随所にみられることです。医療の世界でも感覚を喪失したようなロボット医師ではなく、感性豊かな人間としての医師が必要です。そこに人間自身の精神を立て直すことができる倫理性・道徳性が求められていることに気づきます。人間自身の内面から、倫理的自省や抑制機能が消えると、荒廃した社会病理的症狀がみられます。精神の渴きをいかに癒すか、真の人間関係はいかにあるべきか、他者と緊密に関わるケアの精神のあり方等の課題が生々しく見えてきます。

創立者・廣池千九郎博士の道徳科学における目標は、各人の人格・品性を伸ばすという使命以外に、他面において、道徳科学の用語に示されるように、科学による道徳の補強、つまり道徳実行の効果を科学的に証明し道徳の權威を示すという使命をもっていました。なぜなら「今日の進歩せる科学的頭脳に向かつて、臆断・想像・仮定・推理もしくは演繹より成るところの哲学的議論を試みるだけでは、現代の人心を道徳実行の方面に傾倒せしむることが出来ない。」（『道徳科学

の論文』新版第一冊）からだといのです。しかし、今日の若者、それも日本の青年たちには、文明は高度化するのですが、個々人の精神面では、強い目的意識や上昇志向が影を潜めています。かわって表面化していることは、無気力・無目的で自閉的な性向をもっています。アジア諸国から留学している学生たちと比較すると段違いに意識の低下症狀がみられます。

それは日本の社会全体が成熟時代を迎えているからでしょう。高度成長の時代は終わり、積み残した諸問題と向きあわねばならないという時代の精神状況下にあるわけです。閉塞の時代ともみえます。従ってそうした課題を担う学生を対象に、道徳実行の効果を教えるでも、それこそ効果があるとは思えません。むしろグローバル化による変転著しい社会の中で、「何が望ましい倫理道徳か」を徹底的に考える教育が必要なのです。それをゼロから追求する知的探究心・精神的探究心を求めているように思います。また同時に、倫理道徳を科学的に補強することよりも、逆に倫理道徳原理による過剰な科学技術の抑制こそが要請されているように

考えます。そこで現代の道徳科学は、つぎのような主題を扱うことが望ましいと考えます。筆者が取り組んできたテーマを掲げることにしましょう。

人間として生きるとはどういうことか、その意味を探究すること。生きること・死ぬことの意味。生命倫理の諸問題―生殖技術・胎児診断・脳死と臓器移植手術・終末期医療の問題等。公共社会をいかに築いてゆくか。正義とケアの統合の問題。弱さいかに向き合うか。日本文化の特性の理解。異文化理解の精神と自己文化中心主義の克服。受苦から何を学ぶか。パトスの学の使命。廣池千九郎の直面したいのちの問題・弱さの問題・対話と感化の相違点。求められる経済倫理・社会倫理。

### 三、具体的な展開方法

以上掲げたテーマに沿って、では筆者はどのような取り組んできたかを簡単に説明しましょう。主眼点のみ掲載します。

①授業目的に沿う適切な映像・資料を提示しながら、可

能なかり道徳的感性に訴えるようにする。毎学期使用したビデオ教材は、みな歴史に残る映画であったりドキュメンタリーです。一例をあげれば、「モリー先生との火曜日」「黒澤映画・生きる」「いまを生きる」「レナードの朝」「晩秋」「ギルバート・ブレイク」その他のちの諸問題を扱ったビデオ教材です。いい教材に出合うためには、いつも前向きに取り組み、取材が欠かせません。新しい書籍を見つけ出して自己の取り上げるテーマを絶えず批判し改善する努力が求められます。

②学生自身の過去の生き方・未来の生き方を問うようなテーマ設定を試みること。「人生で受けた受苦とそこから学んだもの」「これまでの死別体験から学んだもの」「自分の親子関係を問い、自立とは、親から離れ自分だけで生きるのではなく、子の自立に由来する親の一抹の寂しさを思いやり包み込むような感性があるか」「子供への虐待からは、四年制大学を卒業し一流企業に就職して思い通りの刺激的な人生を歩んだ人々に共通する不満がみられること」「能動の知と受動の知の使い分け」

③総合的人間学である道徳科学の視点にたつて、具体的な問題と取り組むことで、実践力をつけ、時代を動かすコモンセンスを磨く（からだの中に道徳的常識を培う）。道徳科学の基本姿勢「格物致知」つまり実際の物事や社会現実に直面し課題や問題と取り組む中から真実なるもの、最高の道徳原理の必要性が捉えられるのではないか。だから学生には厳しい社会現実にふれさせることが大切な通路といえると思います。

以上のような目標と狙いに沿って、ともかく価値への探究精神と現実直視の厳しい姿勢、さらに、それだけでは終わらない、担当者の至誠と情熱をもって自己及び社会の変革に努力する姿勢をみせることが必要だと痛感しています。水野が取り組んできた社会貢献活動も、学生にとっては重い意味をもったものと深く理解してもらえたらと念じています。

#### 四、感想

長い間、この科目を担当させてもらい、ともかくも自分の内面的な成長につながったことを大変感謝して

います。授業は何科目も担当しますが、この授業は私自身であり、教育・研究の原点でもありました。毎回刺激的な授業を求めて、教材開発に熱中したり、ビデオ教材発掘に時間をかけたことも、いまは懐かしい思い出となりました。長い人生を歩むことになる若い純真な学生諸君と一緒に、心を一つに、答えのない人生への探究をさせてもらえたことは、教師冥利に尽きるといっても過言ではないと考えます。「先生の授業はともかくも考えさせ、悩ませてくれました。こんなにも人生を真剣に考えたことはありません」というある学生の声は、私にとっては珠玉の価値あるものです。

四十年もの間、一つの科目を黙って担当させてもらえた麗澤大学の寛容さと懐の広さに、いまはただ感謝あるのみです。実に充実した四十年でした。そのうえ終わってみればあつという間の出来事でした。ともかくもこの美しい麗澤のキャンパスの中で、夢中になれるような仕事を与えられた身の幸せをひたすら痛感するのみです。学生の皆さん、そして教員の皆さん、卒業生の皆さん、さようなら。

# 「いのちのつながり」を求めて

—私の授業報告（「道德科学A」「道德科学B」）—

経済学部教授 北川 治男



## 一、自由な価値観研究の時間

麗澤大学では、倫理道德教育の一環として、「道德科学A」「道德科学B」計四単位を一年次の必修科目に位置づけています。「道德科学」の授業の共通目標について、平成十九年度版「講義要綱」には、次のように述べられています。「①創立者・廣池千九郎の生涯（精神と実践）に関心を持ち、建学の精神について理解を深める。②道德は、生きるうえでの行動の指針であり、精神的価値観に深く関わることを理解し、人それぞれの価値観を培い、それを貫いて生きる勇氣と力を養う。③生命・心理・教育・福祉・企業・地域社会・国家社

会・国際社会・地球環境などの分野で、次々と現代社会特有の倫理問題が発生している。それらの公共的諸問題を敏感に感じ取り、新たな倫理原則を検討し提案できる実践力を養う。④共同学習、討論、廣池千九郎記念館の見学、クリンキャンペーンなどの体験学習、心のふれあいなどを通して、自己表現力やコミュニケーション能力を高め、自己の精神を磨き品性の涵養に努める。」

平成十九年度には国際経済学部の三つのクラス（一・四・七クラス）を担当させていただきました。私は、「道德科学」を自由な価値観研究の時間と位置づけ、

「道徳科学A」では、個々人のアイデンティティを確立するための価値を、「道徳科学B」では、現代社会が直面するさまざまな課題を解決するための価値を探索することを目指しています。授業で提供する価値内容は道徳科学（モラロジー）に基づくものですが、それのように受け止めるかについては、学生諸君の自由な批判と判断に委ねたいという授業の基本姿勢を、オリエンテーションで明確に示すようにしています。

## 二、アイデンティティ確立の問題（「道徳科学A」）

まず「道徳科学A」の題目は「アイデンティティ確立の問題」とし、次の三つの目標を掲げています。〈一〉本学の建学の精神と道徳科学のねらいについて理解を深める。〈二〉倫理道徳は人生を豊かにする上で不可欠なものであることを理解する。〈三〉価値観が多様化する社会で、自己のアイデンティティを追求しようとする基本姿勢を養う。

目標〈一〉については、道徳科学教育委員会編のパンフレット「麗澤大学建学の精神―道徳科学」を用い

て、創立者・廣池千九郎の経歴と業績、人となりを簡単に紹介します。また道徳科学（モラロジー）は、廣池千九郎が歴史家・法制史家としての学問的業績の上にさらに研究領域を広げ、歴史・宗教・科学・倫理・道徳を総合する独自の総合人間学として樹立したものであり、現代の麗澤大学では、二つの方向に継承され発展してきていることを紹介します。第一は、倫理道徳教育として学生諸君の人的成長を実践的に支援しようとする方向、第二は、現代社会の倫理道徳、ことに生命倫理、企業倫理、情報倫理、科学倫理、環境倫理など新しい専門分野の倫理道徳を研究する方向です。学生諸君の理解が少し進んだ段階で、「廣池千九郎記念館」の見学を行います。ほとんど独学の廣池にとって、自ら師を求め直接指導を受けることが大業を成し遂げるために必要・不可欠であったことから、見学にあたっては、廣池が師事するなど縁のあった福沢諭吉、小川含章、井上頼圀、佐藤誠実、穂積陳重、新渡戸稲造がどのようなことをした人か、廣池とどんな関係があったのかについて調べてレポートを提出してもらおうこ

とにしています。廣池千九郎の業績を歴史的・公共的な視点から理解してもらったためです。

目標〈二〉については、『自他を生かす道——「互敬の世紀」を拓く』（モラロジー研究所編集発行）をテキストにして、次のようなテーマを取り上げ、倫理道徳が単に社会規範にとどまるものではなく、生きがいや喜びのある幸福な人生を築いていく基本であり、世界の平和や人類の存続にとって不可欠のものであることを理解してもらおうように努めます。①倫理道徳は社会規範であるとともに、より善い人生や社会を築くための価値の創造にかかわるものである。②倫理道徳には、自己の保存発達を目指す「自己利益の道徳」と、自他と第三者（公共社会から地球環境までも含む）の善の増進を目指すより良質な「三方善の道徳」の二つを区別することができる。③倫理道徳の実践に当たっては、道徳的行為とともに道徳的な心づかいの継続と積み重ねが重要であり、それが道徳性や品性を高め幸福実現の基礎となる。④倫理道徳は正義の実現を目指すものであるが、その方法として慈悲の精神を基本にし、

正義と慈悲の調和を図ることが、社会に秩序や平和をもたらす。⑤人類は生態系の一員として万物との相互依存のネットワークに支えられて生存している。自己中心主義、集団エゴ、自国中心主義、自宗教中心主義、人間中心主義などの利己主義の克服が、今日の倫理道徳の課題である。

目標〈三〉は、「道徳科学A」の中心テーマです。道徳性の発達や品性の向上を促進する上で、青年期の発達課題であるアイデンティティの確立は倫理道徳教育の中心課題です。アイデンティティ (identity) は自己同一性などと訳されますが理解しにくい言葉です。Identityの動詞形であるidentityは、「Identity A with B (AをBと同一視・同一化する)」というように使われます。いまAを自分自身とすれば、同一化するべきBに何をもってくるかによって、私自身の定義が異なってきます。Bは自己の帰属する社会集団であり自己の価値観であるといえます。

私たちは、家族、学校、職場、地域社会、国家社会、国際社会、人類社会などさまざまな社会集団に属し、

そこで与えられたさまざまな役割を果たしながら、徐々に自分らしい生き方を身につけていきます。アイデンティティとは、自分らしい仕方でも自己に取り込んだ統合のとれた役割の束であるといえます。さらに私たちは学習や教育を通して、自分自身の価値観や人生観・世界観を形成していきます。アイデンティティのもう一つの側面は、このようにして形成された自分独自の価値観であるということができます。

私たちが生きていく上で特に重要で不可欠の帰属集団は、家族と国家です。この二つは学校や職場、任意のグループやサークルなどが出入り自由な社会集団であるとは異なり、私たちがいわばそこに運命的に生まれ落ちる共同体であり、最も基礎的で包括的な社会集団です。親・祖先から受け継いだ生命のリレーランナーとして、またそれぞれの国の歴史のリレーランナーとして、自己の生命を最大限に生かし、自国の伝統文化の継承発展に尽力していくことが、家族や国民の一員としてのアイデンティティの確立につながります。さらに人生の究極的な意味や心の拠り所を求めるのは

私たちの根源的な欲求です。思想や哲学、倫理道徳や宗教、文学や芸術を通して人生の意味を考え、生涯にわたる生活信条や信念を確立していくこともアイデンティティの確立です。私たちが独自の信条や信念をもつことは望ましいことですが、それは独善的・排他的なものではなく、他の可能性や多様性に対して開かれた互敬の精神を伴ったものであることが望まれます。

三、現代社会が当面する倫理道徳的課題（「道徳科学 B」）

「道徳科学 B」の題目は「現代社会が当面する倫理道徳的課題」とし、二つの目標を掲げています。〈一〉現代社会が直面するさまざまな困難な問題の背景に、倫理道徳的問題が存在することに気づく。〈二〉現代社会が当面する倫理道徳的課題のうち、各自が関心を持つテーマを一つ選び、その原因と対策について考察する判断力と問題解決力を養う。

目標 〈一〉 に関して、産経新聞のシリーズ「溶けゆく日本人―モラル破壊の惨状」（二〇〇七年一月八日

（十六日）を参考にし、現状を直視してみました。ここでは、次のような問題が取り上げられています。①「携帯の奴隷―議場でメール、注意も無視」、②「子供以下の親―身勝手な論理、平然と」、③「“自己中”マナー―電車は自分の部屋？」、④「街に溢れる家庭ごみ―自分の周りがきれいなら」、⑤「救急車をタクシードわりに―公より自分の権利」、⑥「文化財の悲鳴―景観変える恥の刻印」、⑦「ネットと青少年―顔見えなければ…の暴走」。このシリーズを使って問題提起をした後、「モラルの荒廃について、私の訴えたいこと」についてレポートの提出を求め、発表と討論の時間を設けました。学生諸君はモラルの崩壊現象に危機感を持ったようですが、自虐的にならないよう、人生賛歌とも言える「ニューモラルの詩」（木村博作）を毎回紹介し、問題解決への意欲を喚起しました。

目標（二）については、現代倫理のうち、医療倫理、企業倫理、環境倫理の三つを取り上げ、それぞれの分野に関してウェブサイトを、新聞記事、視聴覚教材を用いて問題提起をし、『倫理道德白書』VOL. 1（道德

科学研究センター編集、モラロジー研究所発行）を参照し、それぞれの倫理に関する基本事項を整理し理解を深めました。

たとえば医療倫理では、不妊治療は倫理的にどこまで認められるか、借り腹や代理母は認めるべきかどうかといった問題を考え、また移植医療に関する倫理も取り上げました。インフォームド・コンセント、リビング・ウィルなど基本事項を確認するとともに、医療倫理の基本原則（①仁恵の原理、②無危害の原理、③自律尊重の原理、④正義の原理）についても学びました。

企業倫理については、日本経済団体連合会の「企業行動憲章」（二〇〇四年）を紹介し、企業倫理について具体的なイメージを与えるとともに、企業の不正行為について考え、内部告発の是非について意見を交わしました。またコンプライアンス、コーポレート・ガバナンス、CSR（企業の社会的責任）など基本的事項について学びました。

環境倫理については、アル・ゴアの『不都合な真実』



を視聴し、地球温暖化について認識を新たにしました。「持続可能な発展」のために大量生産・大量消費・大量廃棄をやめて、Reduce Recycle Reuse のライフスタイルに立ち戻るべきこと、そのために私たちは何をなすべきか、何ができるかについて考えました。また環境倫理学からの提言として、①生存権を人間以外の自然にまで拡張すること、②人間のみでなく地球全体を尊重する思想への転換を図ること、③未来世代の生存権を尊重する義務に目覚めるべきことなどを学びました。

#### 四、「いのちのつながり」を求めて

「道徳科学A」「道徳科学B」を通じて、学生諸君は、倫理道徳は生きがいと喜びのある人生や公正・公平な社会を築く基本であるとともに、人類の存続そのものを左右する重大な問題であることに認識を深めてくれたことと期待しています。これからの倫理道徳は「いのちのつながり」をキー・コンセプトとし、横軸においては生態系の相互依存のネットワークに基礎を置き、縦軸においては「いのち」のリレーランナーとして、

前の世代から生命的・精神的・歴史的な「いのち」をしっかりと継承し、新たな創造を加え、次の世代に譲り渡していくことが中心的な課題となると訴えてきました。学生諸君が自らの価値観を形成する上で参考にすることあればと願うのみです。



# 私の道德科学の授業

外国語学部非常勤講師 山田 順



■はじめに

京都清水寺の管主が毎年末に揮毫する一文字、平成十九年は予想どおり「偽」であったが、昨今の政界や企業における疑惑や偽装の相次ぐ発覚は、日本社会の異常さを示して余りある。また上層部に限らず、日常生活のあらゆる場面で無作法で自己中心的な振る舞いが目につき、まさに日本の社会全体にモラル（道德意識）の崩壊を実感させられる現今の時勢である。次代を担う青少年たちは、こうした大人たちの行状をどのように見ているのであろうか。

私は非常勤講師として、月曜日の午後に道德科学の

授業を受け持っている。毎週、授業の開始時刻に遅れないように教室に入り、出席学生たちに挨拶して出席カード兼用のメモ用紙を配る。挨拶を返すのは一部の学生で、多くはいつこうに気にも留めずおしゃべりに夢中になっている。ようやく静かになるころ、学期初めに示した三つの約束を確認する。それは、①授業開始には挨拶し、授業中は他の人の妨げになる私語を慎む。②机と椅子をある程度そろえ、最後列には着席しない。③着席した周辺のごみ（自分の出したごみでなくても）を拾う、というものである。

学期始まりの数ヶ月のうち、何とかこの約束事を

守ってくれるが、後半になるとすっかり忘れ去られてしまう。毎回のようには注意をするが、ほとんどやらなくなるので、こちらもついに根負けしてしまふ。残念だが、毎年この繰り返しである。今や大学経営にとって学生たちは大事なお客さまだし、教員に対する学生の評価も気になるし、そもそも日常的なマナーを身に着けてこなかった学生たちに、この約束を守らせること自体が無理なことかもしれないと思う。

毎年四月、道徳科学の初回の授業では、これまで道徳を学んできた覚えのない学生たちが、大学に入ってからまで必修科目としての道徳授業を履修しなければならぬとは？と一斉にいぶかしげな顔を向けてくる。この授業のねらいを学生なりに受け止めるには、数回の授業を要するようだ。教員のほうとしても、留学生を含む一クラス六十数名の学生たちを相手に、毎週正味九十分間の授業を進めるのは、けっして容易なことではない。

## ■私の授業の進め方

一学期は、『自他を生かす道』（モラロジー研究所編）をテキストにして、章を追ってモラロジーの基本的な考え方を紹介する。各章ごとにあらかじめテーマを設定しておき、それに沿って学生に問いかけたり、私の見聞や経験事例を交えたりしながら、社会生活を送るうえで道徳のもつ重要性について講義を進める。

二学期には、学生の人物研究発表を通して、先人の生き方に学ぶ道徳授業を展開する。夏休みに入る前に予告して研究対象人物を選択させ、関係資料や記念館の有無を事前調査のうえ、夏休みを利用して対象人物のゆかりの地を訪問したり資料館見学をすることによって、郷土の先人・偉人の足跡とその志ある生き方を学んでもらうものである。

こうして一年間の授業を通して、道徳とはマナーや規則を守ることにとどまらず、社会の一員としての生き方にかかわるものだということの理解を深め、道徳実行の手がかりを得てもらうことをねらいとしている。

## ■一学期の授業

授業は午後のため、一方的な講義だけでは九十分間、はとでも持たない。学生たちに飽きられないように、できるだけワークやビデオ視聴を入れながら進めている。とくに一学期の間は、学生同士お互いをあまり知らない様子なので、ちょっとしたワークを入れる。たとえば、初回のほうでは、じゃんけんによるグループ自己紹介、隣席者の似顔絵を描く、自分の郷里自慢など。そのあとは授業の主題に関係づけて、最近の嬉しかったこと・嫌だったこと、魅力のある人間とは、自分のこだわり・とらわれ、人間相関図・恩人リスト、コンビニのおにぎり一つにかかわる人手、自分を支える社会や国の働き、日本人としての誇り、などをテーマに示して、それぞれに自分の考えをメモしたうえで小グループや隣同士で話し合う。

ビデオ視聴は、主にかつての民放番組「知ってるつもり」の録画を利用して、二宮金次郎、レイチェル・カーソン、新渡戸稲造、マザーテレサ、神谷美恵子、中村久子など、授業の主題に関連する人物を取り上げ、その人物の生き方と果たした社会的役割について考え

させるようにしている。この人物紹介は、二学期の授業で行う人物調査研究発表の伏線としている。

毎回の授業の終わりには、横罫入りメモ用紙に、授業内容のコメントや質問等を書いて提出してもらおう。これは出席確認とともに、授業の受け止め方や理解度を図るものとして担当教員の貴重な資料となる。授業の途中に、時折学生に意見や感想を求め、自分から手をあげて発言するものはほとんどないからである。小グループ内での話し合いでは、わいわいと際限なく盛り上がるのに、講義内容についてのコメントを求めても、ほとんど応答したがらない。たまにしっかりとした考えや意見を言う学生がいると、こちらも嬉しくなると、つい一対一の応答になってしまう。そうすると、その問題に関心のない他の学生は別用？に似しむチャンスとなり、授業の雰囲気があやしくなる。しかし、期末レポートに授業についての感想や意見を添付させると、必ず「授業中、もっと他の人の感想や意見を聞きたかった」と記入してくる。そう言うくらいなら、授業中に自分から発言すればよいのに……後の

祭りである。

この一学期の授業内容で、学生たちがまず関心を示すのは、テキスト第一章の道德の種類、第二章の品性、そして第三章のとらわれの心（利己心）である。自分さえよければという自己中心的な心づかいと行い、今に言うジコチューの生き方に対する気づきと反省に関するものである。身近な友人関係、クラブや同好会活動、あるいは近隣社会やアルバイト先などにおける人間関係のつまづきからか、他者に対する思いやりの必要性についての理解が深まるようである。

さらに授業が進み、テキスト第五章の人間としての責務、第六章の伝統報恩に関する内容において、学生たち自身で自分たちがどれほど親や社会の恩恵にあずかっているか、その認識をもって感謝することの大切さにも気づいていく。万事、当たり前の生活に慣れてきた学生にとって、この事実の発見は新鮮な感動を覚えるようだ。とくに親元を離れて大学生活を送るようになった学生にとっては、よく理解が進むようである。

一学期の期末レポートの課題は、「これからの生き方

において大切にしたいと考えること」で、テキストの中から関心を持った章の箇所を引用しながら、身近に体験したことの問題（課題）を例にとって考察したことを記述してもらう（分量は二千字以上二千四百字以内）。授業中には、内職（次の授業の準備）や私語をしている学生たちも、この期末レポートでは、まじめに自己反省と社会に対する視点と考察を書き綴る。

この道德科学の授業を通して、「失いかけていた自分を取り戻し、自分の生き方を見直すことができた」「人間のもろさや弱さに気づいた」「自分のことだけしか考えない視野の狭さを反省し、他人への心づかいの大切さを学ぶことができた」「自分への関心を持ち、家族のことや他人にも目を向けるようになった」など、学生となった自分自身への問いかけ、そして周囲の友人たちと比べての劣等感や優越感に揺れ動く気持ちを具体的に書いていく。

さらに、通学路で経験する社会道德への関心から、電車・バスの優先席を譲ることや歩きタバコと吸殻の

ポイ捨てなど、マナーやルール違反に遭遇した時のわが身の処し方についての赤裸々な告白や葛藤、学生寮やアパート生活あるいはアルバイト先での人間関係での悩みを通して考えたことを素直に記述している。「自然をはじめ多くの人々と社会の仕組みに支えられて生きていることがわかった」「改めて学生生活しているわが身のありがたさを感じる」「自分を大切にして将来は自分の能力を活かして社会に貢献したい」「この授業で学んだことを、たくさんの人に伝え、共感していきたい」などと、自分と他者に対する考察とともに、これからの心づかいや生きる方向を記したものが多く見られる。

そして、最後のほうに異口同音に「はじめのうちは戸惑いもあったが、大学で道徳について学べてよかった」「これからの学生生活、さらに社会に出て、つねに心づかいを見つめ見直していきたい」と書いてある。この期末レポートによって、もがきながら授業をやってきた担当教員が、逆に学生たちから慰められ励まされることになるのである。

## ■廣池千九郎記念館の見学

道徳科学の授業において欠かせない大切なものに、廣池千九郎記念館の見学がある。記念館は月曜日が定休日であるが、授業の一環として特別に開館してもらい、一学期の終わりにごらに実施している。これまでテキストを通じて学んできた道徳科学という学問を構築したのは、どのような人物であるかを知るうえで、また夏休みに帰省して大学の様子を親や友人に話したり、あるいは将来就職や進学に当たって出身大学のことを尋ねられたときに困らないためにも、麗澤大学の創立者とその思想を学んでおくことは重要なことであると事前に説明しておく。

見学は、あらかじめ用意しておいた二十項目ほどの設問に答えを記入しながら数人のグループに分かれて行う。以前に一度は見学したことのある学生もいるにはいるが、改めて見学することで、創立者で法学博士の廣池千九郎の人となりやうかがい、また卓越した恩師との交流とおびただしい学問上の業績、病身を押し

て世界平和と人心開発に献身した足跡を目の前にして  
知ることになる。見学の感想に「母校に誇りをもてた」  
との記入が多くあり、見事なまでにこちらの期待に応  
えてくれる。展示物のなせる業か。

## ■二期期の授業

二期期は、夏休み前から準備した人物調査研究とそ  
の発表を主とした授業を進める。あらかじめ郷土の偉  
人を中心に日本や世界の著名な人物を選んで参考図書  
や資料のあたりをつけ、できるだけ現地視察（夏休み  
中に選択した人物のゆかりの地や記念館の見学）を踏  
まえて発表レジメを作成し、一人十分程度で発表し  
てもらう。

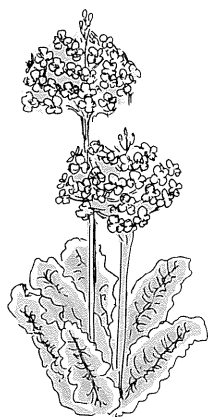
発表に際しては、その人物の略歴や業績の紹介は最  
小限にとどめ、その人物の生き方に影響を及ぼしたも  
のや人生開拓への志について重点をおくように指導す  
る。学生は、「自分で調べてまとめ、人前で発表する経  
験も良かったし、何よりも未知不明の人物について詳  
しく知ることができた」という喜びをもってくれるよ

うだ。それとともに、「その人物が尊敬を受け評価され  
る理由がわかった」「人物の悩みや境遇に共感し、その  
不屈な意志の強さに感銘を受けた」などという感想や、  
「自己利益ばかりに走る人が増え、そんな世の中に慣れ  
きっている自分たちだが、社会のために貢献した○○  
の生き方を見習いたい」「選択した人物○○は、自分の  
師ともなり得る人だと思う」と、これからの生き方の  
模範にしたいと述べる。

これまで履修学生全員に人物研究発表をさせていた  
が、二期期は大学祭をはさんでその準備が大変だとい  
うことで、どうしても発表希望日が後半に集中する傾  
向にある。発表日が遅くなれば、それだけ研究内容が  
しっかりできるかといえ、そうではない。かえって  
おざなりな内容となるので、昨年度からは希望者に限  
って発表してもらうことにしている。もちろん、授業  
中に発表すると否とにかかわらず、全員に人物研究に  
関する期末小論文を作成し提出してもらう。

以上、長年にわたって不十分ながら道徳科学の授業

を担当させてもらっているが、年毎に学生の様子が異なるし、履修態度も学生によってさまざまである。なんとか授業を進めることができているのは、私自身が麗澤大学の出身で、その恩返しつもりであるし、また卒業生が将来どこかで道徳科学につながった活動をしてくれることを期待してのことである。しかし、正直言って、この授業を担当することに苦痛を感じることもがしばしばである。学生たちの反応に一喜一憂しながらも、麗澤大学だからこそやれるこの道徳科学の授業の存在価値は確かにあると信じている。今後も担当教員同士の懇談・検討から示唆を受けながら、授業内容の工夫を重ねていきたいと思う。





# チーム道德科学、その可能性

日本語学科三年 杉木 康人



昨年四月に谷川で行われた、二〇〇七年度外国語学部新入生オリエンテーションキャンプに「チーム道德科学」のスタッフとして参加させていただきました。新入生にとってこのオリエンテーションキャンプは四年間の大学生活を始めるにあたってとても重要かつ貴重な意味を持っていると思います。

このキャンプには、大学生生活の場となる本校・麗澤大学の建学理念である「知徳一体」、そして創設者であり偉大な学者でもある廣池千九郎博士について学ぶという目的もあります。そのため「大穴記念館」、「麗澤館」の見学もプログラムに組み込まれています。その案内

や説明は昨年までは道德科学の授業を担当する先生や谷川の職員の方々によって行われてきました。しかし二〇〇七年度より各学科同様に、道德科学に關しても学生のスタッフを交えてすすめていこうということになり、担当教員である川久保剛先生の下で今回の「チーム道德科学」が作られました。

このスタッフとしての経験は自分にとって様々なことを考えさせられる貴重なものになりましたし、来年度からのチーム道德科学スタッフの学生のためにも、自分が得た経験を形にして残しておきたいと思いました。そのようなわけで、今回の原稿は、まず、自分が

スタッフとして過ごした二日間を時系列に沿って一つずつ書いていこうと思います。文字数の関係もありますのでその全てを書くことはできませんが、できるだけありのままに書きます。それは記録として残すこと、またお読みいただいている皆様にチーム道徳科学の学生スタッフがどのようなものであったのかというのがわかりやすく伝わると思ったことによります。そして最後に、自分が感じたこと、自分が思う今後の改善点や希望などを述べたいと思います。

二〇〇七年度のオリエンテーションキャンプに参加するきっかけは川久保先生に直接誘われたことでした。自分も二年前に新入生としてキャンプを楽しませてもらったのですが、大穴記念館や麗澤館の記憶は正直殆どなく、それはほとんど興味も関心もなかったことによると思います。今は廣池千九郎先生や総合人間学モラロジーという学問にも大いに興味を抱いていますので、せっかくの機会だと思えばスタッフをやらせていただくことにしました。

キャンプ前の春休み、事前に一度川久保先生の研究室でミーティング兼勉強会を行いました。勉強の内容は「廣池千九郎について」と「大穴記念館に関して」。当日の日程なども確認しました。その後、学生課スタッフの方々と打ち合わせをして資料の準備のことや当日の動きのことを話し合い、情報を交換し合いました。

四月五日（水）午前八時集合、配布する資料を運び、日本語学科のバスに同乗させてもらい谷川へ向かいました。着くやいなや、すぐに川久保先生の部屋に集合し先生のアドバースのもとで自分たちの担当箇所を調整しました。最後に川久保先生に持ってきていただいた廣池千九郎の付添人だった水野節子さんのテープ「廣池博士の思い出・のびのびと育てる」を聴いて、廣池千九郎の人間像を少し身近に感じることができました。学生三人に加え学生課の職員の方も手伝っていただけということ、四人で説明・講義をすることにまりました。

初めに講義のために会場作りをしました。椅子を並

べ、各テーブルへ資料をセットにして並べ、臨終の間と千九郎先生が湯治で使われた温泉を見学、確認しました。私ともう一人の学生スタッフの矢口君（日本語学科三年）の仕事は、この臨終の間と温泉の案内と説明をすることでした。講堂で川久保先生が廣池千九郎がどのように人生を送ってきたのか、どのような人間であったのか、先生が追求した学問とはどのようなものであったのかということや学生に伝わりやすいように講義し、その後、新入生を誘導し臨終の間と温泉を案内するという流れでした。一グループ四十人であったため二十人ずつに分け、片方が臨終の間を案内している間に一方が温泉を案内するというように分担し、並行してそれぞれ説明をしました。臨終の間では遺影と五十音ボード、身徳潤の意味、簡素な部屋のこと、付添人であった岡田俊子さんの話、ミレーの絵の説明をしました。英語学科は百二十人と人数が多く三回に分けて説明をしました。

最初ということもあり緊張はありましたが、とりあえず滞ることなくスムーズに進みました。川久保先生

は一回ずつ話し方や内容を変えて工夫しているように思いました。私もあまり畏まらず、新入生に聞きやすいように接し、話し方もやわらかくしてみました。初日の講義を終え、宿泊する奥利根館に帰り夕食を済ませ、温泉に入りました。

入浴後、予定通り九時から川久保先生の部屋で反省会を行いました。まず、それぞれが思ったことを言い合いました。学生スタッフ三人が感じたことはやはり自分たちと新入生との間に距離を感じたこと。創立者の話については興味・関心を示す学生とそうでない学生に分かれてしまう。ましてや関心の薄い学生にとっては亡くなった部屋、臨終の間の紹介などは抵抗を強く感じるのも無理はないのかもしれませんが。「気持ち悪い」と怖がっている学生もいました。

抵抗を感じさせてしまったら意味がない。廣池千九郎、道徳科学という学問のことを伝えることで、影響を与えるまではいかなくとも、プラスとして記憶に残すことができれば今後いつでも見直すことができるし何かの困難に遭遇したときに参考になるかもしれない。

そのような考えのもと、いかに多くの新入生に抵抗を感じさせず聞いてもらえるようにするかということ、改善の目標とし、そのために、「モラロジ」ということばを使うのではなく「人間学」という表現で、「臨終の間」ではなく「廣池千九郎が最後まで使われた書齋」というように言葉の使い方を変えました。私と矢口君は学生同士ということを踏まえ、親しみやすく接せるように振る舞うことを意識しました。

翌朝は朝食後九時から講義が予定されていたので、そのまま大穴記念館へ移動し、資料や会場の準備をしました。電話で学科上級生スタッフと話し、到着時間と人数を確認しました。昨晚の反省会で話したことを踏まえて問題なく講義は進められました。確かに前日よりは新入生の反応がよくなったように感じる事ができました。しかしながら、精神的距離や新入生からの抵抗感というのは依然感じられました。

全ての講義を終え、安堵を感じながら三人、思っていること・感じたことを話し合いながら帰りました。そのときのこと踏まえて振り返ってみると、反省す

べき点、改善すべき点は多くあります。

まずは、学生スタッフの事前学習が足りなかったこととです。もっと深く、廣池千九郎のこと、道徳科学の内容とその働きについて調べ、考えておく必要があった。その効果は実際の説明にも表れるし、概観として説明するときの雰囲気にも出るだろうし、事前に学習を深めることは新入生との距離を近づけるためには必要でした。

そして再三述べていますが「距離・抵抗」というものの。この新入生の時に感じる、道徳科学・モラロジに対する抵抗と距離というのは問題で、三・四年生になっても感じられるものです。「宗教的」というイメージがどうも強い。総合人間学モラロジというのが一体どのような内容なのかをハッキリ知らないうちに抵抗が起き、距離が生まれているように思います。

これは学校のカリキュラムに問題があると思います。勉強する機会、知る機会があまりに少ない。一年生のころは「道徳科学」を必修として履修しますが、三・四年生になれば授業はなく、耳にする機会さえありま

せん。三・四年生の時期は多くの人が就職を意識し、自分の「将来」について考える。それを通じて自分はどうのように生きるかということを生剣に考えるようになる。そういう時期にこそ「人間はどう生きるのか、どうあるべきか」ということを学問として提唱するモラロジーを学ぶ意味もきつかけも生まれると思います。これは自分が経験したことから述べていることです。一年時に谷川キャンプや道徳科学の授業で感じることでできなくとも、総合人間学がどのようなものであるかを知る機会さえあれば、よい影響を受けられる上級生は多くいると思います。

今日メディアから耳にするもの、不誠実な官僚による汚職や企業による食品偽装、そういう大々的なニュースから身の回りにある問題も、それらの多くが道徳・倫理感の欠如というのが根本にある原因だと思えます。環境問題や国際的な問題も結局はこの改善こそが解決に大きく関係しているように思います。そのことを考えても私たち学生が道徳とか倫理のあり方を考えることは意義深い。「考える」というだけでも大きな

意味を持つように思います。

今回のように谷川の道徳科学セミナーを学生スタッフを交えて行うのはとても意味があることだと思えます。新入生と道徳科学の距離を近くできるだろうし、学生スタッフ自身に「生き方」をとらえなおすきっかけを与えてくれます。

新入生に総合人間学の意義を知ってもらうこと、無論これは重要なことで、一年生から自分の生き方というのを考え、道徳・倫理の価値が意識されれば今後四年間の勉強と将来に大きな影響を与えるでしょう。

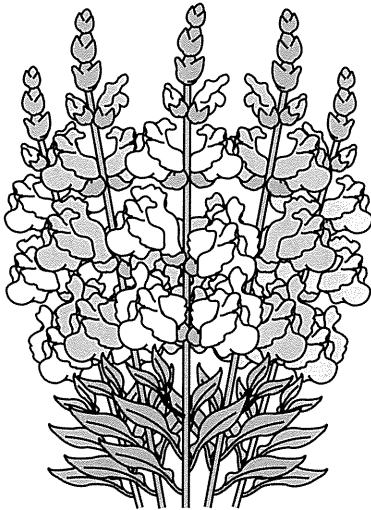
新入生に抵抗を感じさせず、効果的に聞いてもらうにはキャンプに同行する先生方の力添えも大きく関係するように思います。日本語学科の講義においては戸田昌幸先生が説明の補足や、新入生たちが聞きやすいようにたえずフォローを加えてくれ、新入生たちも抵抗なく熱心に聞いていたように感じました。

また各学科の学生スタッフとも事前にコミュニケーションを取り、巻き込んでいければ、上級生スタッフが総合人間学を知り直す機会にもなるかもしれません。

工夫できる点は多々あると思います。学生、先生を含めて全体で取り組む形を作れば、それによりキャンパスの持つ可能性はうんと大きくなると思います。

語学や知識というのはあくまでツールであつて、それをどう使うのかはその人間の精神にある。このことは誰もが賛同することだと思えます。

この谷川セミナーを通して、新入生・上級生・先生共々、「精神のあり方」「人生の生き方」を考える機会になれば、谷川オリエンテーションキャンプは今まで以上に素晴らしいものになるということを確信しております。



## 二代目千英先生

麗澤大学 名誉教授 池田 裕



昭和十年に一私塾として創設された道徳学科専攻塾もやがて「おたまじゃくし」が、手を出し足を出すように、東亜専門学校（支那科・南洋科）から東亜外事専門へと改称し、やがては千葉外事専門学校へと変身していった。この間第二次世界大戦にと我が日本も戦争に荷担して行った。日本国中が戦争へ戦争へと突進して行った。この間、廣池千九郎先生が独特の理想を描いて創設された専攻塾の形は、専門学校へと発展して行ったが、創立者の偉大にしてかつ高潔な根本的な精神は、二代目廣池千英先生に百パーセント継承から祖述されたのである。

さて、初代廣池千九郎博士のことは、大勢の人々が周知のことであるが、二代目千英先生のことは、よく知られていないのではないかと、忖度してこれを御披露させていただく。と言ってもなかなか簡単にはいかないことなので、専門学校から大学に至るまで、廣池千英先生のみきサポートとして陰に陽に先生を助け、時にはその縁の下の方となつて最後まで廣池学園の大黒柱廣池千英先生の支えとなられた宗先生の千英先生についてのお言葉をそのままおかりして、大学二代目廣池千英先生の紹介とさせていただきます。なお宗先生は、学監という立場におられた。ある時、山崎榮教授（数

学)が「学監」というのは、学者を監督するのかね？それとも学生を監督する立場なのかね？」と尋ねられたそうだ。「これには参ったよ」と宗先生が述懐しておられたことがある。なお蛇足を弄すると、『学監』とは「副学長」でもなく「学長補佐」でもない立場で、言うならば学長の代わり即、学長になりかわって、何でもこなし、何でも対応する立場と言ってもよいかも知れない。

それでは、次の紹介を熟読含味していただきたい。

### 廣池千英先生の道

道徳科学研究所と廣池学園との両法人の設置<sup>注1</sup>、大学と高校<sup>注2</sup>という形で進行している学校教育の体系化、各種講座、講習会、研究会等を網羅する研究開発活動の組織化海外開発<sup>注3</sup>の着手、瑞浪<sup>注4</sup>の開拓など、さらに、この間における国家社会への挺身的貢献、教育界における活動があり、ことに晩年はほとんど私生活を擲って大議名分のためにつくされた廣池千英先生の業績は、廣池博士の偉業の継承とその発展であった。こ

の困難な仕事をよくもみごとに成し遂げてこられたものと思う<sup>注5</sup>。

これがすべて品性の力によるものであるから尊いのである。すなわち廣池博士と千英先生と二代にわたる最高道徳ご実行の結果であり、動機、目的、手段のいずれも最高道徳的である。それが大切な点なのだと思う。

道徳科学専攻塾の開塾に先立って、廣池博士はいわれたことがある。<sup>注6</sup>諏訪町のお邸の玄関で承ったことである。「今度ひらく塾は実質上は大学に匹敵するもの<sup>注7</sup>と考える。自分は知人もないわけでなく、現に文部大臣もよく知っている。しかし、無理をしないで、まず私塾で行くのだ」と。そうして作られた専攻塾は、独特の教育内容で、土地も建物も自力で生みだされ、教職員も、外人教師など二三有縁のもののほか、すべて門人で構成された。しかし、私塾ゆえに、施設ごとに税金がかかり、兵役義務<sup>注7</sup>の猶予もなく、経営上は不利であった。廣池博士没後、時局はとみに重大化し、研究所<sup>注8</sup>は解消した。そこで昭和十七年、千英先生は、



制度上やむなく譲歩を忍び、法人廣池学園を設定、専門学校を開かれた。しかし、戦中戦後、資金難はいよいよ甚だしかった。戦後、軍事施設<sup>注9</sup>の払い下げで急設した学校もあった。また補助金、借金、寄付金で賄う学校は多い。しかし、先生はそういうことはなさらなかった。寄付金という名目はあってもそれは会計上のことで、浄財のほかは受け取られず、ことに紐付きのおそれある補助金は一切辞退され、また借入金も財産を取らずさぬ方便に限られた。いま、借金は一文もないと威張れる学校経営者は他に少ないのではなからうか。

ここ数年来、学園で新築が続いて行われたが、みな昭和十年以来の建物が用をなさなくなったからで、使用に堪える限り古い建物を生かしてゆく方針で来ている。いま補修して凌いでいる事務所も、すでに建て直すべき時期に来ているが、先生はこれを後にして、会員のための会館を先にお許しになった。いかなる困難も堪え忍んで、ねばり強く行くのが先生の方針であった。

### 〔注〕

- 1 昭和三十四年
- 2 昭和二十三年四月
- 3 昭和四十三年・ラオス・コスタリカ等に発展した。
- 4 瑞浪市の誘致により話題が出て、実現して行った。
- 5 特に軍部の介入があつて大変であった。
- 6 高田馬場
- 7 大学・高等学校・専門学校の学生・生徒は在学中、徴兵年齢（満二十歳）に達しても延期してもらえた。けれども当塾は一私塾であるがために猶予してもらえなかった。

8 昭和十六年二月八日。道徳科学研究所（現モラロジー研究所）は、発展的解消を余儀なくされた。

9 例えば某大学などは、各地にあった旧軍隊の施設を払い下げてもらい、拡大していった。

人間の寿命は天意であろう。しかし、今まさに円熟の境に入り、縦横に活躍中であつた先生が、こんなに早くなくなられようと誰が想像し得ただろう。数年前に谷川で、眩暈<sup>めまい</sup>を起こされた頃から、にわかに老境に

入られたとは見えたものの、廣池博士の没年を超えて  
なお壯者を凌ぐ趣があつた。

病氣の発見は、三月末<sup>半</sup>だという。しかし、それは  
先生がご家族に異常を告げられ、医師が診断した時で  
ある。三月の半ばに次長先生が英国留学に出発された  
後まで、秘しておられたのかも知れない。昨年末、会  
議の席などで、来年はわからないとか、長生きはしな  
いとか、先になることを冗談めかして言われたが、こ  
の春、数人の理事のいる前で、今度留学から帰ったら  
二、三の事以外は全部まかせると次長先生に告げられ  
たことがある。

われわれが知つたのは四月で、舌の裏に粟粒ぐらい  
のものが出来たように承つた。五月になって、注射が  
強くて手に疔<sup>いば</sup>のようなものが出来たが心配はいらない、  
こんなに治つて来たのだと、はじめてそれを見せられ  
た。注射のあとは疲れるからと、六月四日の三十年祭  
の講演も、前のご講演の印刷物を椅子にかけたままで  
お読みになつた。その後になつて、はじめ梅干の種ぐ  
らいの塊が舌の根に二つあり、今は小豆大になつたか

らもう治つたも同然だ、と多人数に告げられた。はじ  
めから知つていたのは二、三の医家とご家族だけで、  
次長先生にもお知らせがなかつたらしい。

七月の谷川の研修会はお出ましがなく、せっかく計  
画なさつた温泉療養も中止され、もう少しこの注射を  
する、この注射をやっていると肺炎になつたら助から  
ないと医者が言うので東京に居るが、八月の教育者研  
究会<sup>ぼん</sup>には出る、とおっしゃる。ご再考を願うと、講  
演はやめるが挨拶はする、それも都合でやめるが、講  
師として劍木さんなども来られるから、挨拶に行かな  
ければいけないと言つておられた。結局、会場での挨  
拶はやめられたが、その瑞浪からの帰りにかぜをひい  
て肺炎を起こされたのである。

七月二十九日に公務でお目にかかつた時は非常にお  
元気で、いろいろ機嫌よくお話しになつた。私がお目  
にかかつたのはそれが最後で、ご重体の報は旅先で受  
けた。十八日はご容態がよいと伺つていて、夕刻次長  
先生を羽田に迎え、病院へお伴した。門のところまで西  
村君<sup>むらきみ</sup>が早く早くとせく、玄関のところまで早見君<sup>はやみ</sup>が

沈痛な顔で早くと言う、さてはと病室へ駆けつけたのが、ご終焉の直後であった。

廣池千英先生にはじめてお目にかかった日を私は覚えていない。昭和八年の春であつたらう。色の白い柔和なお姿で、そのもの静かな中に強いところのあるお人柄を慕わしくも頼もしくも感じたことだ。おそらく他の人もみな、天真爛漫な温いご性質に強く惹かれたことであろう。緋に紋付、袴、または薄いろの青鼠の背広、夏は白麻服が多かつたようだ。しばしば私の家の研究室にもお出で下さつた。以来三十数年ご指導をいただき、公私ともお世話になつたが、何でも安心して申し上げられる方であつた。

専攻塾がはじまると、千英先生は次長の職に就かれ、麗澤館の右手の室にお泊まりになつていた。そこではよくラジオ放送の音を小さくして耳に手を当てられるようにして聞いておられた<sup>注5</sup>。博士のお部屋からは離れていたが、父の邪魔になるといけないからねとおっしゃつていた。

〔注〕

1 昭和四十三年

2 瑞浪分園で実施されていた。

3 長らく千英先生付の車の運転手であつた。

4 秘書

5 当時は今のようないや・ホーンはなかつた。

先生は非常に雄弁で、六高時代にもよく討論会に出られたそうだが、初期の講習会以来つねに気魄<sup>注1</sup>と雄弁で聴衆を魅了された。声量豊かな熱のこもつたお話しぶりであつた。はじめに、今日はこれこれの話をするとか、幾つのお話をするとか断つて、要所要所に力をこめ、結論を特にはつきりと言われた。

物事を列挙する際には指で数を示しながら一つ何々、二つ何々と言われるのが実に印象的で、専攻塾の生徒たちもよくこの物真似をした。ひとつ、ふたつと言われるときの「つ」の発音が「ちゅ」と聞こえるので、それがことに親しみを覚えさせたらしい。声の抑揚、強弱、間合いが自由自在で、聴衆はうなずき、聞きほ

れた。

同じ話を何回もしないと本物にならないと先生は言われた。しかし、ご自身は雄弁であつたが、いわゆる能弁よりは至誠のある訥弁を高く買われた。

博士のご在世中も、千英先生にはご苦労が多かつたのであろうが、私どもにはわからない。先生は学生とよく遊んで下さつた。野球では投手、庭球では前衛をなさつた。遠足のときは颯爽と先頭を歩かれた。

先生は、八面玲瓏と行動され、思うままに振る舞われたが、少しも奇矯の言動がなかつたので、いわゆるエピソードに類する思い出はあまりないのである。

世間に吹いていた醒い風がいよいよ吹き募つてきた昭和十五年の秋ごろ、私は、もし塾に対して何事か起こつた場合には、縁戚を通じて皇室にご迷惑がかかるおそれがあるという注意を受けた。ある晩、諏訪町のお邸で所長の千英先生にお目にかかり辞職を願ひ出た。先生は「次長に話したか」と問われ、「まだです」と申し上げると、ほかには何もおたずねなく、直ちに許可された。

私は塾に別れるのがつらく、若い先生たちの語学指導に最後の全力を尽くした。後日、千英先生から君は仲々政治家だ、やめる前には特別に働いていったと批評され、そんなことまで先生は気をつけておられたのかと驚いた。

十一月に塾をやめた私は、早まつたのではないかと思つた。しかし、ある先輩から、今はただじつとしていなければいけない、やがてまたお役に立つ日があるだろうと諭された。すると年があげて間もなく、くすぶつていた火が燃え出した。やがて先生は研究所を解消し、専攻塾を改組して非常事態に対処された。白雲去来、独り悠々と松林を逍遙する感慨の日々が続く。ただし、学園には忠実な職員たちが先生の周辺を守り、地方では故杉本翁をはじめ至誠の門人たちが道につながつていたので、やがて昭和二十二年の研究所復活となつたのである。

注1 先生の話しぶりは、まさに音吐朗朗という感じであの小柄な身体から出る大きな声であつた。ちなみにマイクを使うのがおきらいであつた。

戦時中は卒業式の折などにお伺いするほか、あまりお目にかかる機会もなかったところ、戦後のある日、わざわざお訪ね下さって、学生が騒いで<sup>注1</sup>いるからぜひ帰ってくるようにとのお話を承り、二十一年四月からまた勤務させていただいた。

戦後数年間の学園は困難なことが多かった。ある晩先生は大橋理事と私を呼ばれて、金がないがどうするかとお尋ねになったことさえある。校舎用の一部建物を売り払われたのもその頃である。しかし給料の支払いが遅れるようなことは一度もなかった。

学生は空腹を訴え、大半は働き<sup>注2</sup>に出ている。試験になると平素の数倍が出席した。六月の声を聞くと休暇にしてほしいと言って来た。学生全員と講堂で話をしたり、学生代表が事務所に詰めかけてきたこともあった。私ははじめのうち麗澤館内に宿泊していた。ある寒い冬の夜、先生が玄関に出て、下にいて駄々をこねている一人の学生に懇々と諭しておられる姿を拝見した。騒ぐことは騒いでも、学生たちは心から先生を頼りにし、尊敬していたのであった。ただ、空腹<sup>注3</sup>と

勉強の板ばさみに苦しみ、軍国調から変貌するために敗戦国が与えられた民主主義の課題にとまどい、社会の矛盾に悩むのであった。

〈注〉

1 戦後、学生運動が燎原の火の如く、全国にひろがった。本校にもその煙火が飛び火した。

2 いわゆるアルバイトである。

3 学校の食堂の食事はひどいものであった。但し、これは食堂のみならず、日本国中が慢性悪性飢餓状態であった。

先生は、開発のための旅行が多く、一週間も二週間もお留守になることがあった。平素は月曜日に学園においでになり、土曜日に東京へお帰りになる。その間は書生生活そのままのご生活であって、ご家族と一緒<sup>注4</sup>に過ごされるのは休暇中の一部と土曜の晩から日曜いっぱいであった。生活は家庭生活を大切に考えておられたが、学園で起居をさらに重要視されたと思う。これは以前毎日通勤していた私が、いま学園内に居住してみて、よくわかることである。廣池博士はモラロジ

「第一の功労者は奥様であると言われた由であるが、先生の奥様も並々ならぬご苦労であったと思う。

先生のご一生は、廣池博士の祖述であったと思う。学生生徒に対する訓示のほかは、めったに教訓がましいことを言われない先生であって、門人や職員に対しても、事務上は別として、こうこうせよとは言われず、こうすることが人間としてはやっぱり大切だと言われた。そこで、勘のわるい者は、自分のことだと思わず、他人のことだと思つて聞くこともあった。それに平生は、偉人の話とか旅行の話とかが多いので、道徳の話だと思わない人もあったようだ。けれども、先生の言行は、そのことが最高道徳の原理の応用であつて、言と行の裏にある心遣いこそ博士の教訓の実践であつたのだと思う。事務の執行そのものが品性完成の道程であり、人心開発の手段であつたのだと思う。一つの事の企画も決定も、それが、人々に及ぼす影響、その相手の精神に与える影響などと、いつも最高道徳の教育として考えておられたのであらうと思う。その事だけがうまく行くかどうかということ、それも大切ではあ

るが、それよりも、人心に与える影響をさらに重く考へられて、普通の合理的に見える方法を必ずしも是認されなかつたようである。そうして、人を愛して、人を救つて、その温かい気を受けた人々の至誠が集まつて先生の事業となつて現われるのであつたと思う。先生は、自ら事業家を以て任せず、純粹な教育の道に徹すること、かえつてその事業を大成された。教育者廣池千英先生は教育技術者でなく、教育事業家でなく、ひたすら「人心に仁愛の精神を植えつける」ことをもつて使命とし本懐とされたのであつた。先生にとつては、事業も物質も名誉も地位も、最終的にはどうでもよいことであつて、ただ一筋に廣池博士の品性完成の道を継いで歩まれたのであらう。さりげなく、凡人のようには振る舞われた先生の精神生活の奥は、実に清く、正しく、険しく、厳しいものであつたのであらうと拝察するのである。それが聖人の道なのであらう。

生命を大切にするのは博士の教えであるが、千英先生も樹木をいためることを出来るだけ避けられた。麗

澤館の庭はほとんど茂るままになっていた。

こせこせ作り上げた庭はお嫌い、自然のままの風致を好まれた。ただ、森に桜を少し入れようとか、どこのつつじの植え方は無方針だとか、ときどき寸評を加えられた。

こせこせした人間を作るような教育は反対で、スケールの大きな人物を作りたいと考えられた。頭のいい人間よりも腹のすわった人間をむしろ高く評価された。ただし、それぞれに長所と短所をよく見抜いて人を使われた。

先生は、神経が鋭敏で、よく物事に気づかれ、目ざとく、核心を見抜かれた。判断が早く、的確で、明瞭な結論を出されたが、事情によっては長考の上に決定された。無用の説明を嫌われ、要点と結論に注意された。議論は充分に尽くせ、あらゆる角度から検討せよ、ただしいったん決定したらそれに従えと言われた。

全体と部分の調和を考えよ、立体的に物を考えよ、正しくなければいけないが、正しくても人々が納得することではなければいけない、とも言われた。

ゴルフや野球のときの子供のような無邪気さを人は懐かしく思い出すであろう。しかし、省察と訓育の機であったことを忘れてはならない。

批判が電撃のように神経にひびく日もあった先生は、やがて公憤すら表情から消してしまわれた。しかし、正義に反するもの、秩序を乱すもの、無礼なもの、思いやりのないものは、つねに先生の静安を害した。側近や古い職員は、今日は東京で何かご覧になったのだろうか、難しい話はやめにしようかと遠慮したものである。賓客に礼を失したものはひどく叱られた。

内輪のものには辛辣な諧謔を用いられることがあった。「年寄りに教えていただいて有難う」と言われると、若手もが身が竦んだことだろう。私も外国で写してきたスライドを一度ご覧いただきたいと申し上げたところ、「教育して下さるわけですか」と言われて引きさがつたことがある。

理解が悪いと「モラロジアンは正直だから」、みんなが黙っていると「温良恭儉讓でいらっしやるから」と言われた。

俸給基準を上げるとき、定年制を布かなければならないかと心配され、その後も、「父は学者には定年はないと言っていた」と何度も洩らされ、定年制はしばらく棚上げになっていたが、実施の際は残念がられ、退職者のことを心配された。

先生は、むかしから玉のような、春の日のような、美しい方であったが、決して、はじめから母意母固母我ではなかったのである。「父の人間像」もしくは「父を思う」と題する講演の抄記を拝見すると、先生は廣池博士を語られながら、かえってご自身を語っておられるようだ。

負けぬ気の強さ、無邪気、正義感、独創性、ねばり強さ、用意周到さ、自己反省、親孝行などについて、博士を偲ばれる先生の言葉は、とりもなおさず先生ご自身の性格と、反省と、決意とを語るものであろうかと拝察される。

一人でも最後までやりぬくという気概、これは先生がはじめから持っておられて、さらに苦勞の中で強められたものであろう。

登山は、よく研究して、一歩一歩確実に登られた。相当の早さで先登された。健全な人たちの先に立って、ゆがめられた世界を正さねばおかぬという気概。日本は険しい道を歩いている。だから、先生の道は厳しい道であったのだ。

(麗澤大学学監 宗 武志)





## 麗澤大学麗澤会の今後の課題

麗澤大学麗澤会会長

梶 浩



麗澤大学麗澤会の会長に就任いたしました直後、私は一通の手紙を受け取りました。開封しますと、中には一冊の小冊子、手紙、麗澤会協力金が入っていました。

それは、大阪在住の道徳科学専攻塾二期生の大先輩からの手紙でした。小冊子は「専攻塾の思い出」という表題です。手紙には、会長就任に対する激励の言葉、麗澤会への要望等々、大先輩の母校への熱い思いが綴られています。

手紙を読んでいくうちに、ハッとさせられる言葉がところどころにありました。中でも心に残ったのが、

その先輩の在学当時、廣池千九郎先生が塾生への講話の中で述べられたという「麗澤の精神をこの世の中に広めて行くのはこれからの君たちの使命であり、責務である」との言葉です。同封の小冊子にも、同じ言葉が記されていました。

私はそのとき、「大先輩の母校への熱い思いを決して無にしておいてはいけません。われわれが母校で学んだ『麗澤教育』『建学の精神』『麗澤魂』を大先輩から引き継ぎ、そして次の世代に引き継いで行く。これこそが麗澤会の最大の役目であり、使命、責務である」と、決意を新たにしました。

しかしながら、「言うは易く行は難し」と言います。私も実際にどのようなようにしてこの使命、責務を果たしているのかと真剣に悩み、考えました。

\*

私自身は昭和四十年、外国語学部イギリス語学科を二十四期生として卒業し、高度経済成長期の海運界に身を投じました。四十三年の歳月が経過した今、あらためてビジネスパーソンとしての自身を振り返ってみますと、今では死語となった「企業戦士」として身も心も会社に捧げてきた私には、家庭はおろか「建学の精神」を省みる余裕すらありませんでした。当時と現在とは時代背景が著しく異なりますが、若いビジネスパーソンの方々が時間に追われていることは、私の経験からも十分に理解できます。そうした麗澤会員の方々が気軽に集まって息抜きができる場所、なおかつ母校のことを思い起こせるような場所を提供できないものかと模索しました。

会長就任に先立つ平成十八年、東京およびその近郊でビジネスパーソンとして活躍する麗澤会員を対象に、

「東京ビジネスクラブ麗澤会」を立ち上げました。同窓の絆を強め、「麗澤の精神」を培っていく場として、また、異業種交流の場として開催する懇親会は、すでに三回を数え、毎回百名前後の麗澤会員が集っています。参加された方々からは、「建学の精神を思い起こした」という感謝のメールをいただいております。麗澤出身であることをあらためて認識していただくよい機会となつたようです。

通常の間窓会とは一味違うこうした会が全国に広がっていけば、その効果は大変大きいと思われませんが、東京のようにビジネスパーソンの大勢いる大都会だけでなく、他の地域でどのようなことができるかは、目下検討中です。

また、平成十九年十一月十七日に、麗大麗澤会の期別代表世話人会を開催しました。全国から三十数名の代表者が集まり、殊に一五・九パーセントという年会費納入率の低さについて改善策を討議しましたが、結論としては「その起因するところは、母校を誇りに思う心、母校を愛する心の欠如にあり」という意見が多

数を占めました。今後どのようにして母校への熱い思いを育んでいくかは、早急に取り組まなければならぬ課題の一つです。これについて、以下に私見を述べてみたいと思います。

## 一、麗澤の知名度を高める——スポーツ・文化の振興

学校の知名度を高めるには、卒業生が社会（地域や企業）で切磋琢磨し、麗澤の存在感を世の中に知らしめることが最もオーソドックスな方法であり、最も肝要です。しかしながら、そのためには多数の優秀な卒業生を送り出す必要があるでしょうし、また、長い年月を要するでしょう。健全な学校経営のためには、この基本姿勢を保つとともに、急速な少子高齢化に鑑みてもう少し短期的な方策が必要と思われます。

幸いにも、麗澤は課外活動の一環としてのスポーツ、文化活動が盛んです。車いすテニス世界スーパースリーズを制覇した国枝慎吾選手をはじめ、箱根駅伝をめざす陸上競技部や剣道部、野球部など運動部の活躍、また、文化活動でも「全日本きもの装いコンテスト」

世界大会や外国語スピーチコンテストでの優勝等、朗報は枚挙にいとまがありません。このような快挙も、もう少し世の中にアピールし、麗澤の存在感を知らしめたいものです。マスコミは社会への媒介手段として重要ですから、これを活用した広報活動を模索する必要も感じます。

また、殊に箱根駅伝や野球のようなスポーツは、卒業生が団結して応援することでおのずから母校への思い、誇りが醸成され、同窓の絆を強めるという可能性も秘めています。

## 二、麗澤会員の絆の強化

現在の麗澤会では、同期生による同窓会は比較的頻繁に開催されていますが、先輩と後輩とが共に集まる機会は、モラロジーの会合以外では非常に稀です。地区麗澤会の活動の活性化が問われて久しくなりますが、大きな大会等を開催することのみにとらわれず、小さなことから始めることが肝要です。

まずはそれぞれの地域で三、四人程度の集まり（食

事会もよし、飲み会もよし、勉強会もよし）を設け、その輪を徐々に広げて行くのです。しかし、いかに少人数といえども、何の働きかけもなしに人が集まることはありませんから、各地区の責任者の方々が周囲に働きかけていく必要があります。

小さな地域の輪から、大きな地方の輪へ。会員同士の絆が強まれば、必ず「麗澤教育」「建学の精神」が大きな輪を生み出させてくれるでしょう。

### 三、在学生とのコミュニケーションの強化

母校への支援は、麗澤会のたいへん重要な使命の一つです。しかしながら、大学側との対話はあっても、在学生との対話の機会がまったくないのは不思議なことです。

学生は、麗澤会とはどのような組織なのかについて、おおよそのことは理解しているでしょう。しかし、彼ら学生に対して麗澤会がどのような貢献をしているのか、また、彼ら自身が卒業した後、麗澤会に対して何をすべきかについて、理解している学生は少ないと思

います。

麗澤会と学生との対話を通じて、卒業生が母校に対して支援することの大切さを在学中から認識してもらうことは、卒業後の母校に対する姿勢を形づくる鍵となることでしょう。

### 四、麗澤大学の広報活動

広報活動の重要性は先にも少し述べましたが、先日、麗澤大学出身で電通に四十数年席を置いている友人と、麗澤大学の広報活動について話をする機会がありました。彼曰く、「最もインパクトがあり、効果的な方法は、卒業生が社会で、いろいろな業界で、また、グローバルな分野でいかに活躍し、がんばっているかを取材して、在校生をはじめとしてできるだけ広く、大勢の人たちに知らしめることである」と。広報のプロが言う広報戦略ですから、傾聴の価値は十分にあると思います。

\*

具体的な対策は、ほかにも紙面には書ききれないほ

どあると思いますが、要は麗大麗澤会がいかに迅速に  
実行に移すか、そしてこれに皆様方の理解を得られる  
かです。麗澤大学をはじめ廣池学園、モラロジー研究  
所の絶大なるご協力を切望する次第です。

出 鹿澤大学ホームカミングデイ

## 前夜祭交流会

平成19年11月17日(土)



## 麗澤の生活

国際産業情報学科一年 孫 亦楊



二〇〇五年十月三日、僕は中国の北京から日本に来ました。その日から僕の留学生活が始まりました。最初は日本語学校に通っていました。中国で少し日本語を勉強したから、はじめの内は授業もそんなに難しくな didn't think but, time passed and, Japanese grammar is gradually becoming difficult. Japanese grammar is not as difficult as I thought, but time passed and, Japanese grammar is gradually becoming difficult. Japanese grammar is not as difficult as I thought, but time passed and, Japanese grammar is gradually becoming difficult.

ぐアルバイトに行く、同じような生活が一年半も続きました。だから僕は将来の大学での生活をとっても楽しみにしていました。

二〇〇七年、麗澤大学から合格通知書が届きました。その時はすごく嬉しかったです。合格したと中国の両親にすぐに電話しました。両親もとても喜んでいました。

四月、麗澤大学の入学式の日、学校のキャンパスに桜が咲いていました。その景色はすごく綺麗で、心に残っています。会場に行く時、道の両側にいる日本人の学生から、いろいろなサークルや部活動の宣伝ビラ

をもらいました。同じピラもいっぱいあり、日本人は本当に熱心だと思いました。その中にRIFA（麗澤国際交流親睦会）の宣伝ピラを見つけました。外国人留学生と日本人学生が一緒にいろいろなイベントや活動をやるから面白そうだと思い、RIFAに入ろうと決めました。

RIFAのメンバーは一年生も先輩もほとんど日本人だから、はじめはちよつと緊張しました。新入生歓迎会の時もすごく緊張しました。でも時間が過ぎて、だんだんみんなと仲良くなりました。一学期にはパーベキューをやりました。RIFAのみんなは一生懸命で、留学生から「美味しかった」と言われると、すごく嬉しそうでした。潮干狩りにも行きました。夏休みは式根島に合宿に行きました。合宿で私はみんなのために中華料理を作りました。自信はあまりなかったのですが、みんなから「おいしい！おいしい！」と言われて、とても嬉しかったです。二学期には出店と展示で大学祭にも参加して、とても楽しかったです。

これらの活動を通じて、今、RIFAのみんなに言

いたいことは、「お疲れ様でした。本当にありがとう！みんなのおかげで僕は成長出来ました。将来、楽しかった大学生活を思い出すことが出来ます。これからも一緒に楽しい大学生活を送りましょう」ということです。僕は麗澤大学でRIFAに入ることができて、本当に良かったと思います。





「井出ゼミ」の成田歩きから(2007・8・2～3)



麗陵祭で入場者がいっぱいキャンパス  
(2007・11・2～4)



二度目のタゴール賞を受賞した我妻和男教授  
(2007・8・23)



盛大にホームカミングデイ(2007・11・18)



JAICA感謝状を贈られる成相修教授



プロと一緒に「歓喜の歌」を合唱(2008・1・18)



本学16位と健闘した箱根駅伝予選会のスタート直後  
(2007・10・20)



# 私を感じた麗陵祭

～愛'm Home～

日本語学科二年

遠藤千帆未



十一月二日～四日、大学生になって初めての大学祭。Jazz研究会と表千家茶道部に所属している私は、出店団体側からの参加となりました。

麗陵祭一日目は、Jazz研究会のライブがありました。Jazz研究会とは、大人数で行うビッグバンドではなく、五、六人でスタンダードジャズをはじめ、フュージョンやポップスなど、様々なジャンルの音楽を演奏しているサークルです。部員のほとんどが四年生で、来年以降の活動継続の危機に直面し、部員を増やすためにも皆さんにJazz研究会を知ってもらおうと、今回、麗陵祭で二回目とな

るライブを行うことになりました。

六月中旬に入部した私もライブで一曲演奏することになり、音取りを開始したのが九月。本番まで二カ月ありませんでした。いくら経験者とはいえ、一年の私が50曲を演奏しているのか、不安はありましたが、その時は楽器を吹ける嬉しさのほうに勝っていました。

四年生が中心で、卒論や就活が忙しいことに加え外部の方もいたのでなかなか時間が合わず、全員がそろうのは週一程度でした。ひたすら個人練習するしかなく、私の中で不安がどんどん大きくなって

いくのがわかりました。

本番が近付くにつれて練習量も増え、スタジオを借りて練習することもありました。夜しか予定が合わないため、午後十時〜深夜一時に予約を入れるしかなく、眠い目をこすりながら入るタイミングや終わりの合図を念入りに打ち合わせたり、録音して音のチェックをしたりしました。今まであまり話せなかった方とも仲良くなれたり、メンバーの意外な一面を見ることができたりと、スタジオ練習でメンバーとの仲が深まった気がします。私の中にあつた不安もいつしかなくなり、それどころか曲を吹くのが楽しみになっていました。

本番二日前にはメインステージでのリハーサルを行いました。音響や実行委員の皆さんとマイクの数やボリュームについて、寒い中、一曲ずつ念入りにチェックを行いました。なにせ時刻は午後八時を回っていたので、吐きだす息はすぐに白くなっていきましました。それでも一時間弱、リハーサルは行われました。ステージに立つと、二日後には観客の前で演

奏するのだという実感がわき、足がすくんでしまいました。近隣の家に迷惑がかからないように、九時には完全撤収しなければならなかったのも、スタッフもメンバーも総出で片付けを行いました。

本番当日、一面に雨雲が広がりに今にも泣き出しそうな空。ライブの途中で雨が降ってはやっかいなので、結局、校内のステージで行うことになりました。急いで機材を運び込み、ろくにリハーサルもしないままに本番の時刻を迎えました。

ステージに上がった私は緊張しっぱなしで、観客席を見ることができませんでした。そんな私に気づいたのか、笑いかけてくれたメンバーたち。おかげで無事、Song曲を吹き終えることができました。拍手が聞こえた途端に安心して笑いだしたのを今でも覚えています。Song曲が終わると緊張も不思議と消え、途中トランプルもありましたが、ダンス



サークルとのコラボなどをおりませず素晴らしいライブを行うことができました。場所を変更してしまつたからと、ライブ中、柵の扉を開けておいたり、広場に宣伝に行つてくださったスタッフの方々には、感謝でいっぱいです。

麗陵祭二日目は、サニーゲイツ主催のJazz喫茶での演奏と表千家茶道部のお茶会があつたので、動き回つた一日になりました。茶道部のお茶会でお点前を行うのは二年生以上だつたため、一年生は主に受付や宣伝をしていました。私の担当は午前中だつたので、朝早くから準備や待機しなければなりませんでしたが、通りかかった人が声をかけてくれる時もあり、完売に向けて宣伝に力が入りました。

Jazz喫茶というのは、生演奏を聴きながら食事ができる場所です。サニーゲイツから声をかけていただき、Jazz研究会も参加することになりました。お昼からの演奏だつたため、茶道部を途中で抜けてリハーサルもそこに本番へ。曲は一度やつたものでしたが、ライブと違い客席との距離がほ

とんどなく、一日目とはまた別の緊張がありました。演奏の後はまた茶道部に戻り、宣伝などを行いました。

三日間の麗陵祭がこれほどうまくいったのは、やはり実行委員の方々の苦労があつたからでしょう。放課後や昼休みに会議を繰り返し、夏休みは遊ぶ時間を返上して作業に取り掛かり、ほぼ一年をかけて麗陵祭の準備をしていました。雨の日、休みの日も、学校にきて作業を行う姿をよく見かけました。昼休みにはアンケートを配つて、学生の意見を積極的に取り入れようとした姿もありました。

麗陵祭当日は、早朝五時ごろから作業を始め、寒い中受付やゴミステーションに立っていたり、見回りをしているスタッフを皆さんも見ただのではないのでしょうか。特にオブジェやすべり台は子供に怪我がないようにこまめにチェックをしているスタッフの方を目にしました。また、今年は芸人イベントに小島よしおさんが来たことで、これでもかというほどの観客でしたが、トラブルがなかったのは、スタッ

フの方々が目を光らせていたからだと思います。仕事  
が忙しくて食事をとる時間がない、時間があわず  
見たいイベントに行けないなど、辛いことも多かつ  
たはずです。それでも文句を言わないのは、「自分た  
ちの企画したイベントで皆さんの喜んだ顔を見るの  
が嬉しいから」、「信頼できる局の仲間が一緒だから  
頑張れる」と委員の方は語ってくれました。

高校の文化祭は、店を出すといっても制限が多く、  
なかなか思い通りにはいきません。ある程度決めら  
れた枠にそって想定内の企画を生徒が進める高校と  
は違い、大学では一から企画をつくります。何度も  
却下されながら、改善される企画。自分たちで作っ  
た企画は思い入れも違っています。実行委員も出店  
スタッフもお客さんもキラキラした顔が多いのは  
「やらされている」ではなく「自分からやっている」  
からなのだと思います。

茶道部の宣伝をしているときに、にこにこしたお  
ばさんに話しかけられました。毎年来るのが楽しみ  
で、今年もいっぱい買ってしまつたと、とても嬉し

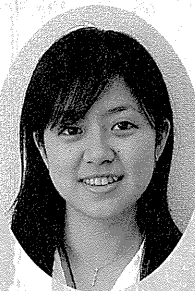
そうでした。私にとって麗陵祭は、普段なかなか関  
わらない近隣の方と接したり、他校の友達が増えた  
りと、人との交流に花を咲かせる絶好の機会。また、  
友達とは意見が食い違い喧嘩をしては仲直りをして。  
少しずつ「家族」になつているのだと感じました。  
たくさんの♡を感じた麗陵祭。まさに、「♡me」  
h♡me」でした。



# 「漢語橋」世界大学生

## スピーチコンテストに参加して

中国語学科二年 谷口華奈



今回私は「漢語橋」世界大学生スピーチコンテストを通して数え切れないほどの経験をすることが出来ました。麗澤大学の先生方の下でスピーチや中国歌曲、中国の歴史・文化・芸術などを学ぶ機会が与えられたこと、多くの方に支えられながら準決勝と決勝に参加できたこと、万里の長城に登り、天安門広場や北京オリンピックに向けて修理中の紫禁城を見られたこと。

私がこの大会に参加することになったきっかけは、一年生の時に発音の授業でご指導いただいた孫先生にお誘いをいただいたことです。父の仕事の関係で

中学まで台湾で過ごした私は、高校の中国語スピーチコンテストではなかなか参加資格が与えられず、残念ながら高校の間は一度も出場する事ができませんでした。そこで大学に上がってから孫先生に「スピーチコンテストに参加したいです」と相談をしていたところ、四月に「漢語橋」のスピーチコンテストの話をいただき、五月から準備を始めました。スピーチの原稿作成、問題集の暗記、即興スピーチの対策、文化技芸の曲決めに始まり、準備には想像以上の時間と努力と気力と体力が必要でした。もともと要領の悪い私は、先生や友達に迷惑をかける事も

多く「無我夢中」という言葉がぴったりあてはまるほど、その場で必要な事をこなしていく事に必死になり、特に五月から七月にかけては目まぐるしく、あんなにも時間が速く過ぎていくのを感じたことは初めてでした。

夏に世界大会に出発する二ヶ月前、私は桜美林大学孔子学院の「中国語スピーチコンテスト中・上級の部」に参加しました。この大会は夏に行われた「漢語橋世界大学生スピーチコンテスト」の東京予選を兼ねており、参加者は慶応・杏林などから七名でした。コンテストのテーマは「オリンピックを迎える中国」で、事前に用意した三分以内の中国語スピーチ、中国の歴史・地理・文化やオリンピックに関する基礎知識の質問、その場で与えられたテーマの中からひとつを選択し行う一分間の即興スピーチ、楽器演奏・歌唱・早口言葉などそれぞれの中国に関する特技を披露する中国文化技芸の披露、の四つが審査内容で、中国文化技芸披露で私は「絨花」という曲を歌いました。

六月桜美林大学PFCで行われた大会当日、順番を決める抽選で私が引いたのは「1」と書かれた紙でした。なんてくじ運がないんだろうと泣きたくなる中、出番を待ちながら壁に向かって発音練習をしていた時のことを今でも鮮明に覚えています。孫先生に「本番はただ一回」「本番は自分が一番!」と思っ  
てやりなさい」と繰り返し言われたことを思い出しながら、自分の気持ちを込めて聞いて下さっている人全員に言葉が届くようにスピーチしました。他の学生の発表を見て、自分のまだまだ足りないところが浮き彫りになったと感じながら、力を出し切った達成感とともに席についていた私。結果発表で「一位、麗澤大学谷口華奈さん」と呼ばれたときの気持ちは言葉で表しようがなく、一生忘れる事はありません。

そして今回、私にとって何より貴重だったものは、二週間に亘って様々な国の学生と中国語を用い交流した時間です。コンテストが終了した夜には、各国の女の子と大会に出る際の衣装を互いに交換し合い

着せ替えをして楽しみました。中でも私たち日本人の持つて行った浴衣は海外の選手にとっては非常に珍しく、サイズの融通もきくため、非常に好評でした。日頃テレビや新聞で報道されている外交問題のことなど、微塵も感じることはなく、そ



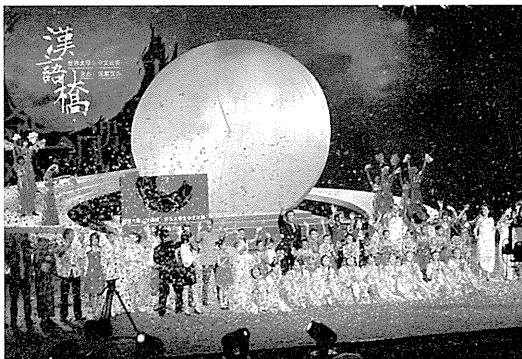
こにはただ全員が一人の大学生として中国語を用いて互いの感じることを伝え合うとても楽しく心地のよい時間が流れており、現地の新聞には各国の選手が楽しく交流している様子をとらえた写真とともに中国語で「台上好対手、台下好朋友。(舞台では良き敵、舞台を下りれば良き友)」と書かれて掲載され、まさに北京オリンピックのスローガンである「同一个世界、同一个梦想(One World One Dream)」が再現された場のようにでした。

中でも非常に印象的だったのは、順位や大会の内容など気にせず旅行気分に参加している学生も沢山いる中、ある国の選手が最終日の夜にぼつりと言った「国へ帰りたくない」という一言。少しずつ話を聞いていくと、彼の国では大会に参加する前に非常に多くの応援と期待がかけられており、決勝まで進めず賞がもらえなかった彼には国へ帰った後、マスコミや人からのバッシングが待っているというのです。これには日本から一緒に参加した友達とても驚きました。日本からはこの大会に北海道、東京、大阪、福岡それぞれ二人ずつ計八名の大学生が参加しましたが、それを知っている人が日本にはどれだけいたでしょうか。中国との関係を非常に大きく捉えている国、それが国の未来を左右する地域では、日本で行われた予選など比べものにならないほど大きな、国を挙げての予選が行われていたのです。友達と家族や大学の先生方が応援してくれていただけの私たち日本人選手にとって、彼の話は選手それぞれが大会に参加するに際し背負っているものや、そ

の重さが全く異なっていることを実感させてくれました。

大会、中国観光全てのプログラムが無事終わった出発の朝、仲良くなった友達に見送られながらホテルを後にしましたが不思議と涙は出ませんでした。今はコンピュータなど連絡手段も豊富であり、簡単に連絡を取ることが可能だからかもしれません。しかし今考えると、きつとその時私の心に、この大会中に私たちが中国語を通して築いた絆は、時間や国境を隔てることで消えてしまうようなものでは決してなく、中国語を学んでさえいればこれから先どこかで必ず再会することができるといふ確信があったのではないかと思います。「互いの国を旅行する時には、ツアーガイドをする」これは私たちが交わした約束のひとつです。今でもメールをする際に、「みんなが日本に来たら、どこに連れて行こう」と考えるのは今の私の大きな楽しみであり、世界中に中国語を通して知り合い、中国語を通して交流した友達がいる、と言うのは私にとって何よりの自慢です。

今回私が世界大会に参加して得た経験とそこで頂いた評価は、決して私一人の能力や努力で手に入れたものではなく、長期に亘って熱心なご指導をいただきました孫先生、李先生をはじめ諸先生方と、たくさん仲間の支えがあつてこそ実った結果だと心より感謝しております。また大会が終わった今、与えられた「二位」という順位は、まだまだ私が言語に限らず、より多くを学び日々精進することの必要性を指摘し、同時に新しい目標を見つけこれから前に進むうとしていく私の背中を押してくれるものだと思います。本当にありがとうございます。

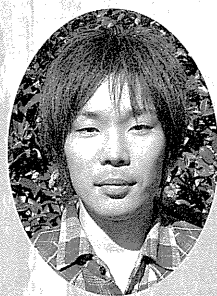




## 成田歩き

中国語学科四年

保泉圭佑



八月二日の夜から、三日の昼にかけて「成田歩き」が行われました。

「成田歩き」とは、千葉県柏市から成田市までの約五十キロの道のりを歩くイベントです。

今年は男子二十八人、女子六人の合計三十四人が参加しました。

夜九時に麗澤大学を出発し、手賀沼沿い、利根川沿い、成田線沿いを歩き、成田山新勝寺を目指すと、そこから電車組と、さらにそこから歩いて新勝寺を目指す、徒歩組に分かれます。下総松崎以降は山を

三つ越えるので、かなり過酷な道となっています。今年は十二人が挑戦し、レベルの高いイベントとなりました。

この「成田歩き」というイベントの起源は、何十年も昔に遡ります。最初は、寮生の入寮時のイベントだったと聞きます。それが最近復活し、今では井出ゼミ生を中心に、伝統行事として受け継がれています。

「成田歩き」の目的は、「忘我の境地」の体験にあります。体力、気力の限界に達したとき、人は何を考えるのか。体力、気力の限界を感じ、それでも歩

くその先に何が見えるのか。それを見つけて出す旅なのです。

「成田歩き」を行うにあたって

一番重要視したのは、安全です。そのために下見に力を入れました。去年行った時のコースを基に、自動車で二回、自転車で二回、下見を行いました。その中で、狭い道、交通量の多い道などの危険箇所をピックアップし、改善策をとり、また、一時間以内のペースで休憩が取れるよう、休憩ポイントを探しました。ほとんどが去年と同じ場所でしたが、中には、去年無かった場所にコンビニが出来ていたり、下見の重要性を改めて実感しました。

当日は、気温が高く、また、突然のスコールに見舞われましたが、脱落者も少なく、無事に辿り着けたのが、幸いでした。

#### ◆参加者の感想◆

「何も考え付かない。何故歩くのか？そんなのわからないけど、ただ足は前へ前へと。足の痛みしか感じることとはなかった。ゴールしても、何も考えられな

かった。それで良かった。ちょっと安心した」

「今年もビールが美味しい。でも、自分はただただ疲れました」

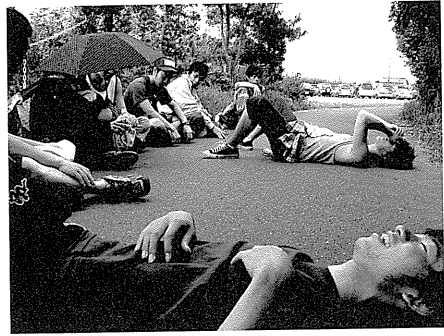
「五年目にして初めて参加することが出来ました。何か苦しいことがあった時、皆で歩いたことを思い出し、頑張ります」

「有言実行することが出来ました。また一歩成長することが出来たと思います。しかし、それと引き換えに足はボロボロです」

「途中、『自分頑張ってるな』と感じたとき、心が洗練されている感じを受けました」

「麗澤から成田山まで歩けるものだなあと感じました。歩ききることが出来たのは、みんなで励みがあったからだと思います。また、このような丈夫な体に育ててくれた親に感謝しないとイケないと思いました」

「キツイのはわかっていたけど、やらずに後悔するの嫌で参加しました。自分の嫌な面と、ヒトの良い面をたくさん見ました」



「膝が壊れそうです：経  
験になりました」

「自分もやればある程度  
は出来るのだと思いま  
した。やらずに諦めず、  
次々にチャレンジしよ  
うと思いました」

「いつもはあまり気にし  
ない風の音や、雨の匂  
い、草や花の香りなど  
をととても身近に感じる

ことが出来ました」  
「経験とは何事も大事である。自分を  
知る道のりだった」

「つらかった」  
「地獄のような一日だったけど、最後  
は達成感でいっぱいです」

「いつもだったら寝ている時間に歩  
いたことで、月の高さの変化、星の多  
さ、徐々に明るくなる空、なに

より朝日を見ることが出来ました。普通  
の生活をしていたのはあまりお目にか  
かれないので、とても嬉しかったです」

「此度で三度目の参加となりました。一  
度目はただただ歩き、二度目は余裕  
を持って達成し、三度目は最後の壁を  
突破と、回を追う毎に成長している自  
分に気づきました」

「今回は自動車でのサポートで参加し  
ました。『ウサギと亀』のウサギのよ  
うな気分でしたが、『待つ』事の重要  
性を感じました」

「二回目の参加で、道を知っているた  
め、先は長いという気持ちと、もうす  
ぐ休憩だから頑張ろうという気持ち  
が重なって、複雑な気持ちでした。そ  
れでも辿り着けたのは、お互い助け合  
っていたからだと思います」

「楽勝です、と言っていたのですが、歩  
いてみると大変でした。今まで五十キ  
ロ歩くことはなかったのです、今まで  
の人生で大変思い出に残る出来事だ  
でした」

「大変良い思い出になりました。今度  
は電車で来ます」

「やりました！成田山までサンダルで歩ききりました！サンダル楽勝！」

「今回は初参加の人も多く、沢山の人に成田歩きを体験してもらったと思います。皆様お疲れ様でした」

「当日参加で、下総松崎まで歩いてしまいました。このあとバイトです」

「予想以上に厳しく長い戦いとなりました。きっと一生に一度の貴重な経験だと思うので、人生の思い出として自分の中に残しておきたいです」

「最初はあまり乗り気ではありませんでしたが、歩いているうちに絶対完歩してやるといふ気持ちになりました。途中、足の痛みや眠気等で、後悔したときもありましたが、成田まで完歩し、今は達成感と自信に満ちております」



## 一期一会

### 一泊二日体験入学を通して

英語学科四年 田中幸恵



麗澤大学では、毎年八月一、二日に「一泊二日体験入学」を開催しています。これは、高校生を対象に一日だけのオープンキャンパスよりもより長い二日という時間をかけて、麗澤大学のことを知ってもらいたい、という想いから毎年開催されている珍しい体験型オープンキャンパスです。毎年百人前後の高校生が全国から参加してくれます。参加する高校生は、一泊二日を職員の方や在学中の私たち、アドバイザーと共に過ごします。この体験入学は、麗澤大学についてのクイズをしながら巡るキャンパスツアー、先生方による模擬授業や入試対策講座など盛

りだくさんのプログラムで構成されています。この体験入学に参加する高校生の中には、春のオープンキャンパスに参加し、さらにこの一泊二日に参加する人もいれば、初めて麗澤大学を訪れる人もいて様々です。

こんな私も高校三年生のときに、一泊二日体験入学に参加し、麗澤大学に憧れた一人でした。最初は、一人で参加することが不安でしたが、アドバイザーや職員の方が困っているとすぐに声をかけてくれて、とても優しく接してくれました。また、アドバイザーの人たちが、大学生活について「とても楽しい」

と語る姿に憧れました。私も「優しくて、毎日が充実してきらきらしている大学生になりたい」と思うと同時に、麗澤大学が大好きになりました。帰り際には、この体験入学で出会った友達も出来て、とても楽しかったです。

私は、大学一年生の時から、オープンキャンパスや一泊二日体験入学にアドバイザーとして参加させてもらっています。一年生の頃は、どうすればいいのかわからずにただ高校生に聞かれたことだけに答えていました。しかし、周りの先輩方は私にしてくれたように困っている人がいたら、すぐに声をかけにっていました。そして、よく見てみるとすごく動いていました。私のようにじっとしている時間がないのです。そんな状況でも、高校生一人ひとりのどんな質問にも笑顔で答えていて、びっくりしたことを今でも覚えています。「せっかく時間を作ってオープンキャンパスに足を運んでくれたのだから、今日来て良かったと思ってもらえるようにしたい。満足して帰ってほしい」という想いがあることを、あ

る時、先輩に聞きました。そんな想いを知り、私も自分から声をかけて、高校生に私の大学生活や受験生活についての話をするようにしました。すると、高校生の「ありがとうございます」の一言が本当に嬉しくて、もっといろいろ教えてあげたくなり、麗澤大学についての勉強もするようになりました。学年が上がるごとに先輩アドバイザーに仕事を教えることが多くなり、自分のことだけでなく周りを見て行動することの大変さを知りました。先輩アドバイザーの方たちが、じっとしている時間がなかったのは、自分よりも周りを気遣い、自ら細々した仕事を裏でひっそりとこなしていたからだ、その時になって初めて知りました。そして、「そのような小さなことが、このオープンキャンパスをいいものになっているんだ」と、私は感じるようになりました。

オープンキャンパスや体験入学での高校生との出会いは、私の最高の宝物です。また、私がアドバイザーとして参加していなければ、出会えないアドバイザーの先輩や後輩などの仲間や職員の方との出会

いも私の宝物です。みんなに個性があり、尊敬できる人たちに囲まれて過ごすことは、とても幸せなことだと思えます。だから、参加してくれる高校生や仲間、職員の方と作りあげるオーブンキャンパスや体験入学は、私にとって、毎회가出会いと発見と学びの場でもあります。

体験入学では、「スクランブルコミュニケーション」といって、一日目の夜に、高校生たちが興味のある学科の部屋へ行って、教授やアドバイザーとざっくばらんに何でも話せる時間があります。いくつかのグループになって、お茶やお菓子をつまみながら、リラックスした状態で高校生たちが話せる時間です。受験はもちろん、留学、授業やサークルなど、いろんな話題で盛り上がりがあります。私は、スクランブルコミュニケーションで出会い、今でも忘れられない高校生がいます。その高校生は、私が推薦入試で合格したことを知って、「推薦入試について聞きたいです」と私に言ってきてくれました。その男の子は、「英語学科に入学したいです。推薦入試を考えています」

と目を輝かせて、その想いを私に話してくれました。その想いに応えるために、私も私自身の受験生活の話やアドバイザーなど、伝えられる限りのことを伝えようと、「ありがとうございます」と、笑顔で言ってくれました。体験入学で出会ったその子のことは、ずっと気になっていました。年が明けて四月下旬、私がキャンパスを歩いていると、「先輩、お久しぶりです。推薦入試で合格して入学できました。ありがとうございます」と、私の前には、あの男の子が笑顔で立っていました。私は、本当に嬉しくて、びっくりして「よかったね。本当にがんばったね」と言うのが精一杯でした。それだけでも嬉しいのに、目を輝かせていたあの男の子は、「自分もアドバイザーになりたい」と言って、今、私と共にアドバイザーとして立派に活躍しています。私は、後輩が成長していく姿を見ることが出来て、本当に嬉しく思います。アドバイザーをやっていたからこそ、このように素晴らしい出会いが出来たのだと思います。

私は、アドバイザーというものは、けして大げさ

な言い方ではなく、関わった高校生の人生に影響を与えるものだと思います。自分の未来のために、大学を選び、受験をするということは、努力も必要ですし、苦しい思いだつてたくさんします。長い時間をかけて挑む山登りみたいなものです。私のように大学受験が人生のターニングポイントになることだつてあります。だからこそ、今、これを読んでくれる高校生には苦しい受験生活を乗り越え、入学してから「この大学を選んでよかった。今、幸せだ」と思える瞬間が来るように、しっかりと前を向いて自分の大学を選んでもらいたいと私は思います。それが、もし麗澤大学だったら、私は嬉しいです。

私の大学四年間は、アドバイザーとしての素敵な思い出がいっぱいです。私は、一つ一つの出会いが縁となり、楽しい毎日につながっていくものだと思います。私は、麗澤大学の学生として本当に幸せです。私に、四年間もアドバイザーという役割を与えて下さった広報室の皆さんと仲間に感謝しています。本当にありがとうございました。





# 「麗澤」という校名を胸に

硬式野球部主将(国際経済学科三年)

佐藤 光英



今、世間では早稲田大学の斎藤佑樹投手が注目をあび、大学野球全体をにぎわっています。大学野球といっても、日本全国、各大学が様々なリーグに所属しています。私たち麗澤大学硬式野球部は千葉県大学野球連盟に昭和六十一年に加盟しました。リーグは一部から三部の構成になっており、現在は三部リーグに所属しています。年二回、春季・秋季のリーグ戦に参加しています。部員は様々な地域から集まっており、野球に対する考え方も価値観もそれぞれまったく違います。高校時代は皆がひとつの目標に向かい、毎日練習に励んだ部員が大半を占めて

います。しかし大学では全員がそろっての練習というものがなかなかできず、それぞれの自主的な活動がとても重要といえます。現在は週四日の練習と決して多くはありません。平日は授業の関係もあり、夕方六時半から練習を行っています。ナイターでの練習のため十分な練習とはいえませんが、とにかく楽しく、そして勝つことを念頭に置き活動しています。

大学の部活は強制という感じではなく全てが自己責任です。部活に出ることは当たり前ですが、少ない練習時間をどう生かすかは自分次第です。私は大

学に入學し野球部に入り、自分から行動しなくては  
何も始まらないということ、また個々の時間の使い  
方が上手くならないといけないことを学び  
ました。麗澤野球部は自己責任を鍛える場所といえ  
ます。部員それぞれの努力が、チーム全体のレベル  
アップにつながっていくのだと思います。しかしだ  
からといって個人プレーに走るかというところは  
ありません。むしろ麗澤野球部のよいところは野球  
を楽しむ、部員同士の仲がとてよいところが特徴  
です。相手チームに「麗澤との試合は楽しい」。そう  
言われることがよくあります。もちろん試合に勝つ  
ということが第一です。勝利にこだわる野球ができ  
るからこそ楽しみを求めることができるのです。そ  
んな環境が麗澤野球部にはあります。

そんな野球部ですがここ数年、様々な苦難があり  
ました。私は麗澤大学に入學して三年がたちます。  
私が入學したときの野球部の部員は二名でした。平  
成十六年秋から野球部は部員の不足からリーグ戦の  
棄権、休部という事態となりました。一時期、野球

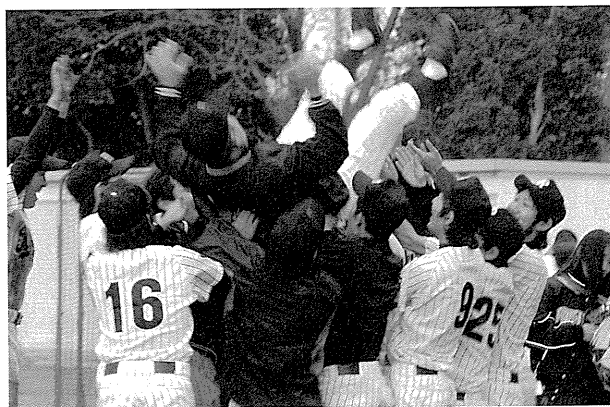
部を廃止にするという案も持ち上がったといいます。  
そんな中、部の存続を信じ、ひたむきに練習を続け  
ていたのがその二名の先輩方です。そんな先輩方の  
頑張りから、私が入學した平成十七年度、私を含め  
五人の学生が入部、そしてもう一度野球がしたいと  
いう思いから先輩方が野球部に再入部をし、野球部  
は復活しました。監督、コーチもいないゼロからの  
出発となりました。その年の春季リーグ戦の欠場は  
避けられませんでした。二シーズンの棄権を乗り  
越え、平成十七年度秋季リーグ戦から再び参加を果  
たしました。その後、麗澤高校で二十六年間監督を  
務めた丹羽重信氏を監督として迎え、コーチにはO  
Bの林慧氏を迎えました。そして復活を遂げてから  
三年目のシーズン、平成十九年度秋季リーグ戦。私  
たち野球部は悲願の三部リーグ優勝を果たすことが  
できました。

今年度の秋季リーグ戦十二試合では厳しい試合が  
多くありました。一試合、一試合、チームが一丸と  
なり戦うことができました。少ない部員ですが一つ

のボールを全員で追うことができたらこそ、優勝を果たせたのだと思います。その後の二部リーグと入替戦では一勝二敗という成績で二部リーグへの昇格はなりませんでした。ですが最後まで麗澤らしい試合することができました。次の新たな目標として「再挑戦」と

いう言葉を掲げ、再び三部リーグ優勝を目指し、今度こそ二部リーグへの昇格を果たせるよう練習に励みたいと思います。

現在、麗澤大学では部活動をやる学生が減少しています。一度しかない学生



生活を遊びやバイトで充実させたいというのの一つの考えだと思えます。しかし大学で部活に入り、部員全員が目標に向かって日々頑張るということは、個々の力に必ずなるということを私は実感することができました。大学の友人に「部活なんてよくやるなあ」とか「いつも大変だね」と言われます。ですが自分の大好きな野球ができることに喜びを感じています。意見の違いから言い合いになること、喧嘩になることは多くあります。そんな経験も部活に入らなくてはできない経験の一つです。私は主将として、今後も部員一人ひとりが成長できる場として、野球部を作っていこうと思います。

私たち野球部は様々な方々に支えられ部活動を行っています。グラウンド、部室、野球に必要な道具が当たり前のように使用できることは本当に有難いことです。野球部の活動は学生課、広報室、大学後援会、学園全体の方々、そして顧問の土井正准教授のご支援があってできることです。これには本当に感謝の気持ちでいっぱいです。近年、リーグ戦の日

程上、授業の公欠等が増えています。野球部だから当たり前に公欠が認められるという考えや部活をやっているからなどの理由で授業を休んだり、遅刻してもいいという考えの部員がいるようです。大学の代表として野球をやらせてもらっているという気持ち部員一人ひとりがある程度自覚しなくてはいけないと思います。今後、課外活動はもちろん、学校生活においても野球部が率先して、あいさつ、礼儀などの姿勢を示すことが大切だと感じています。

私は「麗澤」という名が大好きです。「麗澤」とは、相連なる二つの沢が互いに潤しあうという意、つまり友人同士、部員同士の切磋琢磨を意味します。この「麗澤」という校名を胸に野球ができることに喜びを感じ、今後も感謝の気持ち忘れず、野球部として活動していきたいと思えます。



# 弓道の魅力

弓道部主将 (国際経営学科二年)

出羽

烈



## 一、活動内容

弓道部は現在(平成十九年度)四年生六人、三年生四名、二年生四名、一年生三名、合計十七名(男子十名、女子七名)で活動しています。活動日は月、水、金、土の週四日です。平日は、午後六時半から八時半まで、土曜日は午前九時半から十二時半まで練習を行っています。

春は、新入部員の勧誘、指導と、千葉県大会、春季トーナメント戦に向けての練習が中心となります。毎年、何人もの新入生が道場まで見学に来てくれます。日本人はもちろん、日本武道に興味を持った留

学生も多くいます。今までにも様々な国の留学生が在籍しており、国際交流も行うことができます。また、初めてのことや新しい環境での不安を少しでも和らげられるよう、新入生に丁寧によさしく指導することを心掛けています。春の大会は立て続けに開催されます。新学年になって最初の大会なので、それぞれが新たな決意を持って試合に臨んでいます。

六月には日本武道館で行われる大会に出場します。ピンと張りつめた空気の中で、緊張する舞台ですが、日本武道館で弓を引ける機会はなかなかないので貴重な経験です。他大学の試合やOB戦を観ることで、

大きな刺激にもなり、勉強にもなります。

夏になると、廣池学園にある研修寮にて合宿を行います。合宿中は闇雲に矢を射るだけではなく、入退場の仕方や基本動作など、昇段審査で評価される体配の練習も行います。短期間で集中して弓道に打ち込めるので、個々の力が一番伸びる時です。また、合宿中の集団生活は部員同士の親睦が深まる場でもあります。

秋は九月中旬から十月中旬まで秋季リーグ戦が行われ、男女共リーグ昇格を目指します。弓道部ではリーグ戦を一番大きな大会と位置付けています。三年生にとっては引退前の最後の大会です。一年間の練習の成果が試される時であり、部内の士気がより一層高まります。リーグ戦終了後には新人戦があります。新人戦は一、二年生だけが出場でき、新主将になって最初の大会です。そのため、ここから新たなスタートといえるでしょう。新人戦では多くのことを考えさせられます。感じたことをどう活かしていくか、今後の部活動を考える上でとても大切な

大会です。また同時期に大学祭があります。大学祭では出店の他に、演舞会を行います。たくさんのギヤラリーの前で気持ちのこもった演技を披露し、毎年好評を得ています。

冬の道場は寒く、風の冷たさが身に沁みますが、春の試合に向けて日々練習をしています。大会がしばらくないため目標も作りにくい時期ですが、春の結果は冬の練習次第です。大事な基盤作りの期間として、課題の克服や射形の向上に努めています。また、寒さの中での練習は精神的な鍛錬にもなります。毎年五月と十一月には昇段審査が行われています。段位は弓道の実力を示す目安になります。大学生にとっては三段取得が難しいとされていますが、我が弓道部でも過去に四段まで取得した人もいたので、決して不可能ではないでしょう。

## 二、大会成績

平成十九年五月に千葉県総合運動場で開催された千葉県学生弓道選手権大会では、福澤尚大さん(国

際経済学科四年)が個人の部で準優勝しました。さらに、六月に日本武道館で開催された全関東学生弓道選手権大会の団体の部で、女子Aチームがベスト十六入りを果たしました。これらは、弓道部始まって以来の快挙です。

### 三、目標

正射必中。これは正しく、美しく弓を引けば自然と的に矢があたるという意味です。弓道はただ弓を引いて的に当てるだけの競技ではありません。古来は実際の戦場を想定した中を重視したものでしたが、今日では弓道は武道であり、美しい射をするところが最終目標です。まだまだ正射必中とはいきませんが、それを一番の目標に毎日の練習に励んでいます。

正射必中に近づければ結果はついてくるはずですが、秋期リーグ戦で勝ち上がり、部を昇格させ、最終的に男女共一部を目指しています。今年惜しくも昇格できませんでした。しかし、諦めたらそこで終わ

りです。私たちは最後まで諦めません。悔しさをバネに何度でも挑戦するつもりです。難しいことだからこそ、弓道部は大きな目標に向かって、部一丸となつて日々精進しています。

### 四、弓道を始めて

私は、大学から弓道を始めました。四年間の大学生活の中で、今まで経験したことのない、新しいことに挑戦してみたいと思ったからです。一つのことには精一杯取り組むことにより、卒業して振り返った時にとっても大きな財産になると思います。

弓道は、技術だけを磨けば上達するものではありません。むしろ、一番大切なことは精神力です。試合中、集中力を維持できるか、プレッシャーに耐えられるか、自分の実力を練習通り出し切れるかなど、全て自身の精神力にかかっています。これらは、他のスポーツでもいえることかもしれませんが、弓道は特に強い精神力が求められる武道だと思っています。私がそれを実感したのは、一年生の時に初めて出場

した試合です。練習でできたことが、本番で全くできなかつたのです。この反省から、技術面はもちろん、精神面の強化を意識して練習に励みました。その結果、徐々にではありますが、試合でも思い通りにできるようになってきました。精神的な強さは、弓道だけに限らずこれからの人生で必ず必要でしょう。強くなるためには自分を知ることが大切だと思います。私は、弓道を通していろいろなことを経験し、以前よりも自分のことがわかってきました。自分の強さ、脆さなど。弓道は、自身を成長させてくれるとてもいい武道です。

弓道部は、あまり部員が多くなく大変なこともあります。ですが、部員全員で力を合わせて頑張っています。それぞれの力が合わさって、初めて成り立ちます。誰か一人でも欠けてしまえば、弓道部ではなくなってしまうでしょう。しかし、四年生の卒業により人数が減ってしまいます。弓道には堅いイメージを持っている人も多いかもしれませんが、そんなことはありません。先輩、後輩の交流は盛んに行っており、

個性豊かな人たちが揃っています。新しいことを始めた方、自分自身を高めた方、弓道の腕にさらに磨きをかけた方、緑に囲まれた道場に、ぜひ一度見学に来てください。私たちはいつでも新しい力をお待ちしています。



平成19年度麗澤祭での演武会の様子



## 部に昇格し積極的に活動

きもの & お作法の会部長(英語学科三年)

橋口 絵里 香



私たち着物・お作法の会は、きものを通して日本の文化や思いやりの心を学ぶことを目的としています。

今年の四月に行われた、きもの装いコンテスト世界大会では、学校対抗の部で守田智美さん、牧野由布子さん、細野友香さんが優勝、振袖個人の部で江島未希子さんが第二位、外国人の部でノラ・デバインさんが優勝という素晴らしい成績を残すことができ、部員一同晴れやかな気持ちで新学期を迎えることができました。入学式当日は振袖姿で新入生に入部の案内を配り、とても良い宣伝になりました。そ

の甲斐あってたくさんの方に見学にお越しいただき、外国人留学生を含む八名が入部しました。新たなメンバーを迎え、上級生は改めて気を引き締め、指導に励みました。春は新入生との交流を深め、夏に向けて浴衣の練習をいたしました。色とりどりの浴衣に様々な帯結びを結び、自分で浴衣を着て出掛けるのを待ちわびたものでした。

七月に行われた部活動懇親会では、コンテスト出場メンバーによるデモンストレーションを披露させていただきました。学校関係者の方々の前で披露させていだいたのは初めてのことでしたので、私た

ちにとつても大変喜ばしいことでしたし、他団体の方々と交流を深め、励ましあうことができました。

八月には片平先生による礼法の講義が行われました。この講義でマナー検定にも備えることができました。様々な場でのきものの着こなしやマナー・礼儀作法を勉強することができ大きな機会です。

後期に入り、文化祭へ向けての練習が始まりました。部員それぞれが、浴衣の帯結び、小紋にお太鼓結び、振袖にふくらずめ、あるいはコンテストのデモンストレーションを一生懸命に練習し、何度もしリハールを積み重ねました。いつもはそれぞれに自装の練習を行っておりますので、大学祭の練習は部員全員が協力してひとつのものを作り上げる年に一度の行事です。今年度もたくさんのお客さんに来場していただき、私たちの日々の練習の成果を充分に披露することができ、私たちも部として一致団結できました。

そして十一月二十三日には今年度のきもの装いコンテスト関東大会が行われ、私、橋口絵里香と別科

生のユリア・ギアケさんが出場し、振袖の部で第二位、外国人の部で優勝、という成績を残すことができ、私は四月に行われる世界大会に出場をいたしました。ユリアさんも世界大会への出場権を獲得しましたが、残念ながら、三月にドイツへ帰国してしまいうため出場ができません。私がユリアさんの分まで精一杯頑張ろうと思います。

大学祭を終えると二年生は成人式に向け振袖を自分で着る練習を始めます。変わった帯の結び方を先生に教えていただき、当日は自分で振袖を着て成人式に出席します。四年生はいよいよ卒業を間近に控え、他装の練習や卒業式の袴の練習を始めます。卒業式では私たちも卒業される先輩方の袴の着付けをお手伝いします。卒業生にとって一生に一度の大切な日を、素晴らしい一日にさせていただくために、私たちも先生方と一緒に精一杯努めさせていただきます。

今年度はサークルから部活動に昇格することができ

き、様々な面で活動しやすい環境を作っていたことができました。また、学校の行事から学校外で行われる行事まで、たくさんの場で披露させていただく機会を与えていただいた一年でした。色々な方にお目にかかることもできましたし、部の宣伝も大いにできました。私も部長を務めさせていただき、人をまとめる力、思いやり、感謝の心、目配り・気配り・心配りなど、学んだことがたくさんあり、それは一生の宝になることと思います。来年度は更に学校行事に積極的に参加し、麗澤大学の課外活動を盛り上げ、私たち自身も一人人として、部として成長していきたいと存じます。



# 合唱部の成長に期待して!!

合唱部部长 (英語学科三年)

鈴木聡美



「え？合唱部なんてあるの？」

これは私が所属している部活の話をした時に返ってくる大体の反応でした。そうです、あるんです。こんな話をしたら部員にどう思われるかわかりませんが、この反応をされるのが嫌で、自分が合唱部員であることを胸を張って言えない時もありました。合唱という学校内での部活の中でメジャーの部類に入るであろうものが、こんなにも認知度が低いことに、恥ずかしさすら感じていた時もありました。一生懸命練習した時間、仲間と作り上げた曲の数々、その時間全てが無意味なものに感じられてしまった

からです。確かに、部員も少なく、校外での大きな活躍もないとなると存在感はないかもしれません。素敵な仲間と先輩方と共に過ごし、作り上げた部活を堂々と胸を張って紹介できない自分に嫌気が指し、私はなんとかこの気持ちを改善しなければと考えました。そして二年前の十二月、私は部長になることを決めたのです。

現在の合唱部の現状をお伝えします。部員は一年生五人、二年生二人、三年生五人、四年生二人（十二月で引退しました）の計十四人という少ない人数で構成されており、部室は六畳の部屋が連なる研究

棟B棟一階の和室を使用しています。練習時間は毎週火、水、金の夕方六時半から九時までの二時間半で、発声練習、来たるステージでの発表曲を練習しています。特別講師を呼ぶわけでもなく、部員の音楽経験や趣味、趣向を中心とした話し合いで作品を作り上げていきます。歌う曲は主に、J-POPや洋楽、ミュージカルの曲など、学生の皆さんに人気の高い曲や、ステージに合う季節の曲を選曲しています。その主な理由は、私たちの発表の場は、足元から固めていこうという理念の下にあり、いきなり大きな舞台に立つことではなく、歌わせていただいている麗澤大学への感謝の気持ちを優先しているからです。そのため、入学式と卒業式での校歌、国歌斉唱、ホームカミングデーでの発表、学友会主催の新入生歓迎会、クリスマスパーティー、麗陵際など、麗澤大学生、または麗澤大学関係者に一番近いステージを優先的に行うようにしています。

それではここで、そんな私が部長を務めた二年間を今振り返り、合唱部の去年と今年の比較をしてみ

ようと思います。比較する内容は全部で三つあります。

まず一つ目は部員の男女の比率です。去年は私が二年生であったこともあり、上には三、四年の先輩がたくさんいました。特に女性が多く、四年生においては六人全員が女性であったため、学年ごとにグループを組み発表する際、女性のみ美しいハーモニーを奏でていました。男性部員は二人しかおらず、男女別の発声練習で感じた孤独感や、男性にしか出ない低いパートであることを理由にいつも同じベースの担当をお願いすることなど、肩身の狭い思いをさせてしまいました。しかし、今年の一年生の男子の割合は、五人中四人。全体の男女比率が五分五分になったことで、低音に厚みが出るバランスの取れたハーモニーを奏でることができるようになりました。また新たな挑戦としては、大学祭で男性がS M A Pの『オレンジ』、女性が一青窈の『ハナミズキ』を、男女で分けることで声の高さを揃えた男性、女性曲の発表をすることができました。

二つ目はイベントです。昨年はリーダーセミナーに参加できなかったため、孤独な部長として目の前のイベントに参加するのみだったのですが、リーダーセミナー後のネットワークにより生まれたつながりで、合唱部は大きく他団体との交流に大きく前進して行くこととなります。昨年までは、フィルハーモニー管弦楽団のみなさんとクリスマスコンサートを開催を行っていましたが、今年新たにお近づきになったイベント時には欠かせない音響照明委員会、楽器と共にステージを盛り上げるサニーゲイツ、ノリのよい音楽で若者が集うフォークソング研究会、しっとりとした大人の雰囲気漂うJAZZ研究会、そして音楽に全く関わっていない学友会会長、これらの各代表が集まり、自らが得意とする楽器を担当したバンドを結成しました。普段は方向性がまったく違う団体の代表達ですが、音を奏でるのが大好きという共通点で良いものを作りたい、そんな気持ち一心で自ら抱え持つ部長職の間を縫って練習しました。そのとき出会った新しい楽器、今まで私達が奏



でていたものとは違う種類の音楽、そして違った客層は、私たち合唱部にも新たな刺激となりました。時に求める形、方向性が異なることで、悩むこともありましたが、それも良い経験です。

そして三つ目は部長自身です。新人部長のときは、何も分からなかった私を陰ながら支えてくれた前部長の存在があり、更にたくさんの優しい先輩方に支えられてなんとか運営していました。しかし時間を守らなかつたり、会議に出席するのを忘れてたりなど、人間として最低限のルールを守らず、常に慌てふためいていた余裕のない部長であったと思います。当時の日記を見ると、部活の中では常に元気なムードメーカーでなくてはならない、授業より部活の時間を優先する、部員の意見をしっかりと聞くなど、頭の中に存在した部長イメージは当時の私には酷な物であり、実現するたびにリスクが伴うようなものばかりでした。そして、二年目に突入して立てた目標は同じ過ちは繰り返さないということです。一年目で失った信用を取り戻し、当たり前前の仕事を当た

り前にこなし、更に新たな活動を開始することが二年目の課題でした。相変わらず時間に追われる生活を送っていた点は変わらないのですが、部長の仕事をや前よりも楽しく感じる事ができたと思います。そんな余裕の表れとして、後輩部員に部活の相談や、部活を思うが故の厳しい指摘を受けるようにもなりました。一年目は自分の部長としてのマナーの向上に努め、二年目は、それはもちろんのこと、部員や他団体との交流に目を向ける事ができたと感じています。

これが二年間合唱部の部長を務めた私が思う我が部活です。来年の部活の成長を期待しながら、ただの一部員として貢献していきたいと考えています。支えてくれた部員の皆様、学生課の皆様、音響照明委員会の皆様、サニージェットの皆様、JAZZ研究会の皆様、フォークソング研究会の皆様、その他にもこの二年間で出会い、合唱部と関わっていただいた全ての皆様に感謝します。ありがとうございました。

# 二〇〇七年を振り返って

麗大六十五期 国枝慎吾



車いすテニスは、障害者スポーツの中でも最もプロフェッショナルな競技のひとつです。健常者のテニスと同じITF（国際テニス連盟）が管轄しており、年間約百四十大会が世界各地で開催され、大会には賞金も設けられています。世界トップ選手の中には特定の仕事を持たず、いわゆる「車いすテニスツアー」で生活する選手さえいる程です。私は、二〇〇二年から本格的にツアーを周り始めました。二〇〇七年は十五大会に出場、約四ヶ月は国外トーナメントを転戦しました。本稿では、二〇〇七年を振り返ると共に、私の車いすテニスに対する想いや考えを綴りたいと思います。

一月は全豪オープンが開催されました。この時期のオーストラリアの気温は四〇度を超えることもしばしば、テニスコート内は五〇度を超えます。我々日本選手を含め、北半球の選手たちにとっては、真冬から真夏の気候に変わります。どの選手も暑さとの戦いが強いられるわけです。テニスに限ったことではないと思いますが、試合を左右するのは、「如何に準備をしてきたか」に拠ります。準備というのは試合前のウォーミングアップだけではありません。試合の何時間前に何を食べるのか、何時に起床するのか、はたまた前夜に何を食べるのか…。海外遠征では時差の調整も必要に



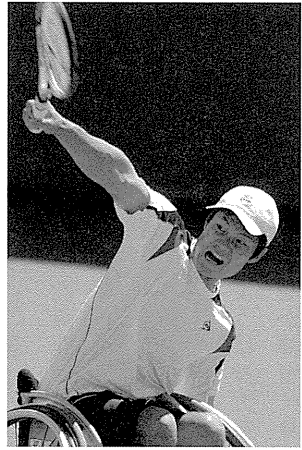
なりません。準備不足を感じることは、試合中の不安に繋がります。不安が自信を奪い、それがショットを乱します。気候の違いを考慮して、全豪オープンへの準備には一週間のキャンプで万全を期して臨みました。その結果、順調に勝ち上がり決勝戦の接戦を制して全豪オープン初優勝。世界ランク一位の座に就くことができました。

「世界一位というのはどういう気分なのか」——高校時代に初めて世界一位の選手を見たときから私自身がそこに辿り着くまでの七年間、ずっと興味を抱き続けてきたことです。私の想像では「一位にいる間は最高に幸せな気分がずっと続く」なんていう甘い世界だったのですが、実際は全く違いました。全豪オープンで優勝し、一位になった瞬間は確かに「言葉では表せないような感動」が込み上げてきましたが、私の場合はその日限りのものでした。次の日からは、「追われる立場」というプレッシャーが襲い掛かってきます。「ライバル達に抜かれないように練習をしなくては」と心では思っているが、なぜか練習に身が入らない…ポー

ルが前から飛んできているのに、「なぜ俺はテニスをしているのだろう」と雑念が混じりこみ集中できない日々が続きました。精神的スランプの根幹は自分より上位の選手がいなくなりました。それまでは「上位の選手に勝つ」という標的を作り練習していました。それができなくなりました。

二ヶ月間のスランプから脱出したのは、四月のフロリダオープンでの優勝が原因でした。精神的に不安定な状態のなか挑んだ大会で散々な結果を予想していま





したが、久しぶりの実戦がテニスの楽しさを思い出させてくれました。一球一球がいとおいしくなるあの感覚は

長い間忘れていたものだったのかもしれない。私のモチベーションに変化を感じたのは、その時からでした。「上位の選手に勝つこと」から「自分のテニスを磨くこと」へ。例えば、テニスを始めたときは純粹に「テニスが上手くなりたい」という気持ちで練習していたはず。「テニスを磨くこと」は原点であり、永遠のテーマでもあります。そのことを見失わない限り、ランキングに関係なくチャレンジ精神を持ち続けることができますと思っています。

全豪オープンに続き、世界四大大会であるジャパンオープンが、五月に福岡県飯塚市で開催されました。最近では、日本国内の大会に出場することが少なくなって

しまった分、言わば「ホーム」で開催されるこのタイトルへの気持ちは特別なものがあります。一年毎に足を運んでくださる方も増え、沢山の応援に励まされながら試合をする喜びは、海外大会では味わうことができない感動です。お陰で前年に引き続き、連覇をすることができました。

その後はフランス、チェコ、スウェーデンなど欧州を転々とし、七月にはブリティッシュオープンが英国・ノッティンガムで開催されました。この大会で優勝すれば世界四大大会全制覇「生涯グランドスラム」(前年の全米オープン優勝含む)となります。肘の痛みを抱えながらの試合となり苦しい大会となりましたが、現地ではコーチに支えられ優勝することができました。この優勝によって、生涯グランドスラムを達成すると同時に、一年間に四大大会全制覇という「年間グランドスラム」に王手がかかりました。しかし、車いすテニス史上いまだ誰も成し遂げていない「年間グランドスラム」は、私に重圧を与えました。

全米オープンが始まると、頭の中は四六時中「テニ

ス」。コートと離れると、コーチや日本選手と談笑しリラックスするのが普段のスタイルですが、そういったことを頭が避けず。寝る前には「次の日体調を崩したらどうしよう」と理由もなく不安になったり、試合前の練習では一つのミスに過敏にイラついたり。決勝戦前夜は、睡眠剤を飲まなくては眠れないほどでした。結果は最大のライバルであるアマラン選手を破り優勝。年間グランドスラムを達成することができました。重圧を押しつけて優勝できたのは、二〇〇四年アテネパラリンピックでの経験があったからです。引退覚悟で臨んだアテネでの金メダルは、「俺は重圧に打ち勝つことができる選手だ」という自信を与えてくれます。私自身が常に唱え続けていたことは「アテネに比べたらどんなに楽か」、「北京パラリンピックはこんなもんじゃないはずだ」という言葉でした。四年間を賭けて挑戦する「北京」が間近に迫ってきている中、全米オープンでの重圧は北京パラリンピックのための最高のテストになりました。

こうして、二〇〇七年は年間グランドスラム達成と

いうこれ以上ないシーズンを送ることができました。しかし、北京で金メダルを勝ち取るためには、更にテニスを磨いていく必要があります。最後の最後まで自身に挑戦し続け、悔いの残らないよう限られた時間を大切に過ごしていきたいと思っています。皆様、今後とも温かいご声援を宜しくお願い致します。



バカラ・アスリート賞授賞式で

## 薔薇を通して心の交流

麗大五十五期 葛西照美



私は麗澤大学在学中、当時留学提携校だった英国コベントリー大学へ半年間留学しておりました。今回寄贈させていただいた薔薇はその時大変お世話になった故アラン&アイリーン・ミラー夫妻の名前を、薔薇専門家であり麗澤大学同期の平岡誠氏のご協力の下、新種に名付けさせて頂いた世界でただ一つの薔薇です。今回二人への感謝の気持ちがこうして形となり、しかも母校へ残すことができたこと、改めて関係者皆様にも感謝しております。

ミラー夫妻にとって私は初めて受け入れた学生であると同時に、自分の家庭に下宿生を招くこと自体もこ

れまでにない、彼らにとってはじめての経験でした。

二人は当時私に「学生と一緒に住むのは初めてのことでだし、今まで夫婦二人きりの生活だったから、最初はどうなるか少し不安だった。でも、今の私たちは本当にハッピーなのよ。今まで平凡で単調だった毎日がこんなに楽しくて素晴らしいものになるなんて。あなたが来てくれたおかげだわ」と話してくれました。そしてその気持ちを様々な形で表現してもらい、私自身も充実した留学生活を送ることができました。言葉も不十分な異国育ちの私を、自分達の娘のように、時には厳しく、大きな愛情で接してくれた二人に、言葉で

は伝えきれないくらいの感謝の気持ちでいっぱいだった私は、帰国前、その気持ちを二人に伝えると、「あなたの日本の両親とは比べものにならないけど、私たちも、あなたのことがとても大切なのよ」という言葉が返ってきました。

この一言は当時の私に大きく響くものでした。それは、二人が自分にむけてくれる思いの深さを知ると同時に、それまで当たり前のように受け流していた、日本の両親の、自分への愛情というものにも気付かされる、大きなきっかけとなったのです。以前は、目新しいことを吸収する喜びばかりが前に出て、自分一人で成長しているかのような錯覚すらしがちな私でしたが、周りの人々の支えがあつて自分があるのだと、心から感謝できるようになったのです。これも彼ら二人の愛情にふれたことがきっかけだったのだと、今改めて思います。

今回こうして二人への感謝の気持ちを形に残すことができたわけですが、やはりこれも私一人では実現できなかったことです。大切に育てた薔薇に快く名付け

を承諾して下さった平岡さん、植樹までの様々なケアをして下さった田中駿平先生をはじめ、木下廣太郎総務部長、生方亨さん、他学校関係者の皆様、植樹式に集まってくれた友人や後輩の皆さん、そしてこの薔薇を大切に育てて下さる教職員や学生のボランティアの方々、多くの人々の支えがあつてここへ至ることができていと心より感謝しております（特に恐縮でもあり大変感謝しておりますのが、薔薇の植樹がされた後、大学職員の方々の有志からなる「薔薇を愛する会」が発足されたことです。仕事の前後の時間を費やしてケアをして下さっています）。私の夢のような思い付きから始まったこの新種の薔薇計画、今日までの過程で特に感慨深く痛感したのは「人のご縁」でした。ご縁がご縁を呼び、実現化していったとしみじみ感じております。

この薔薇を通して、または花が咲くのを見る度に、人は言葉や文化の壁を超えて心の交流ができるということ、また、自分はひとりではなく、心の交流を通して支えあう多くの関係があつて成り立っているのだと

いうこと思い出すきっかけとなり、まわりへの感謝の気持ちを出すきっかけともなれば良いと考えておられます。そしてそれが私自身へのきっかけとなるだけではなく、麗澤大学で学ぶ学生達に少しでも伝わってくれたらなおうれしく思います。最後にもう一度、これまで携わって下さったすべての皆様に心からの感謝の気持ちをこめて、ありがとうございますでした。



# 感動を与えられるようなゴルフファーに

麗大六十二期 岩津賢典 けん すけ



今まで野球などで動く球を打っていたのに、止まっている球にはなかなか当たらないのです。それが悔しくがむしゃらにボールを打っていました。それで、ある程度ボールが打てるようになってきた二年生の頃によくやくゴルフコースにデビューすることが出来ました。

麗澤瑞浪は、ゴルフの環境にはとても恵まれていて、なんと隣がゴルフ場なのです。そこで初めて目にしたゴルフ場にとっても感動したことを今でもはっきりと覚えています。そこは幻想的な世界でした。少し霧がかかった中、目の前を徐々に朝日が昇っていき、段々とその霧を薄くし、太陽が山から顔を出したときには、

自分がゴルフを始めたきっかけは、麗澤瑞浪中学ゴルフ部に所属したからです。その入部理由も、ただなんとなく楽しそうだからという単純な考えからゴルフ部にしました。それまでは野球やサッカーといった一般的なスポーツの経験はありましたが、ゴルフとは全く縁がなく、とても新鮮で楽しく始めることが出来ませんでした。始めて半年ぐらいはずっと素振りをさせられ、ボールを打たせてもらえるようになったのは秋ぐらいいだったと思います。

その頃はプロゴルフファーになろうとは少しも思っておりませんでした。それに、ゴルフとは難しいもので、

一面綺麗に敷き詰められた芝生が清々しい早朝の空気の中緑色に輝きを放つのです。これほどゴルフ場が綺麗なものとは思いませんでした。また、その時がゴルフというスポーツの虜になった瞬間です。

練習よりもゴルフ場に行くことが楽しくて仕方ありませんでした。それからは毎週のようにゴルフ場での練習を希望していました。中学二年の夏に試合があるというので出場することにしました。初めは県予選だったのですが、今でこそ宮里プロ三兄弟や横峰さくらプロなどの影響で子供にゴルフをさせる親など珍しくもなくになりましたが、当時はまだまだ子供にとってはマイナーなスポーツでしたし、贅沢なスポーツとされていたので子供のゴルフ人口は今と比べてかなり少なかったのです。ですから、岐阜県の県予選の出場人数は十五人弱だったような気がします。そこで初出場ながら県予選を通過して、中部地区大会に駒を進めたのです。

中部地区大会では散々な結果に終わってしまいました。ゴルフができることの喜びはよりいっそう高く

なっていました。中学三年の時にも県大会を通過して中部大会まで進みましたが、全国大会までは程遠い結果となりました。高校でもそのままゴルフを続け、全国大会まではあと少しの所までは進むのですが結局出場することができませんでした。

麗澤大学でもゴルフ部に入部しました。麗澤大学ゴルフ部も敷地内にショートコースがあり環境としては非常に恵まれておりました。講義が終わるとコースに出て練習するという毎日を過ごしました。

土日の休みの日はゴルフ場でキャディーのアルバイトをすることになりました。それは仕事が終わってから、ゴルフ場でゴルフができるからです。そこで自分にとって運命の人と出会いました。その人は自分がバイトをしていたゴルフ場に所属していたプロゴルファーです。今までゴルフをしていた中で一番身近に感じたプロゴルファーでした。そのプロと初めて一緒にラウンドした時にすごい衝撃を受けたことを鮮明に覚えています。今まで見てきたゴルフの中で最も衝撃的で且つ最も感動的でした。ゴルフでこんなに人に感動を



与えることができるなんて想像もしていませんでした。

その時に自分も人に感動を与えられるゴルフアになりたいたいと思ったのです。後にそのプロから教えてもらったのは、『スコアも大事だけでも、魅せるゴルフを覚えなさい』と言われました。今話題のスーパー高校生石川遼選手も魅せるゴルフアの一入だと思えます。一昔前だと、ジャンボ尾崎プロや青木功プロなど、人気の出る選手は必ず魅せるゴルフができるのです。それからそのプロに、技術的なことだけでなく精神的な面も色々と教えて頂きました。自分が大学三年のときにそのプロが独立して千葉県内の練習場でレッスンをすると、プロからの誘いもあり卒業後に雇ってもらうことになりました。

その練習場では毎日昼から夜まで生徒さんにレッスンをし、空いた時間に自分の練習をするという毎日ゴルフ漬けの生活でした。今までは、自分のゴルフのことは考えていませんでしたが、人にゴルフを教えるということの難しさを初めて体験しました。その中でも一番苦労したのは表現方法です。同じことを十人に

言っても理解してくれるのは三人だけ、残りの七人にはまた別の表現で伝えなくてはいけません。一つの動作を教えるのに何種類もの表現を用意しなければいけません。十人十色とはよく言いますが、まさしく言葉の通り十人いればみんな理解できる箇所が違います。その為に自分も色々勉強し、また、どうすれば一番理解してもらえるのか、その人の癖を判断し、試行錯誤しながら教えておりました。自分が理解出来た表現では他人には伝わらないのです。

人に物事を教えるというのはこんなに難しいものかと痛感させられました。しかし、同じことを伝えるのに何種類もの表現を用い、ようやく理解してもらえた時には凄く感動しました。また、人に教えることによって自分の技術や考え方の向上にも繋がります。あるプロの勧めもあり二〇〇五年十月レッスンプロの資格テストを受けることになりました。その結果は合格し、晴れて認められたレッスンプロになれたのです。

しかし、自分はそれで満足しませんでした。自分が

どこまで出来るか試してみたくなったのです。二〇〇六年トーナメントの予選会であるクォリファイトーナメントに出場しました。そのトーナメントは、ファーストからファイナルまで合計四回の予選があり、ファイナルの上位三十名が翌年のシード権がもらえると、いう大変狭き門です。ファーストは全国で行われ、自分は千葉県で出場しました。その競技の三日間は台風で最悪のコンディションでした。自分の力の無さを痛感する結果となり予選を通過することは出来ませんでした。

そこからまた、翌年に向けての練習が始まりました。しかし、下積みの身分で給料が良い訳でもなく、月日ばかりが過ぎていく自分を親は心配で仕方がなかったと思います。今年、父親の勧めで実家がある大阪に帰ることになりました。幸い実家は商売をしていることもあり、昼間は家業の仕事をし、終わってからゴルフの練習をするというハードな日常になりました。二〇〇七年のクォリファイトーナメントは岡山県で出場することとなりました。

ファーストは三日間競技で上位二十一名が次のセカンドに進むことが出来ます。初日69でラウンドし単独五位と好位置にいましたが、二日目に75と少しスコアを崩してしまい八位タイ、最終日は70で少しだけ伸ばして三日間トータル2アンダーの六位タイでファーストを無事通過することが出来ました。次のセカンドでは残念ながらサードに進むことは出来ませんでした。

ファーストは通過したので、一応二〇〇八年はトーナメントプレーヤーとして何試合か出場できることになりました。二〇〇八年から自分の新たなゴルフ人生がスタートすることになり、不安と期待でいっぱいです。しかしまだ自分の実力だと、テレビで見えるような試合には出場できませんが、出場出来る試合にはどんな出場していきたいと思えます。もともとずっと練習し、人に感動を与えられるようなゴルフアーになれるように頑張っていきたいとおもっています。運命の人の出会いから九年、ようやく一歩が踏み出せた気がします。人との縁はいつどこでどのように訪れるかわかりません。こうしてプロになれたのもその人のおかげ

げだと思っております。これからも、人との縁をもつ  
ともっと大切にしていきたいと思えます。



# 編集後記

◆平成十九年度は新しく中山理學長を迎え、二十年度よりの学部の改組を控えて新しく麗澤大学が生まれ変わる時期でした。そこで本学の向かう方向を確認し、新生麗澤大学の特色を理解するために、学長および両学部長の手記を掲載しました。

◆また、今日、大学の個性が問われ、建学の精神や理念といったものが改めて注目されています。そこで本学の最大の特徴である道德教育を特集として取り上げました。

◆「コラム」のコーナーには連載をお願いしている「温故知新」、麗澤会のことなどを掲載しました。さらに「麗大生の今」・「卒業生の今」のコーナーには多くの在学生や卒業生からの記事が寄せられ、大変豊富な内容となりました。

◆ここにご多用にもかかわらず、貴重な経験を披露していただいたことに對して心より感謝申し上げますと同時に、本誌が本学の教職員や学生のみならず、広報誌としてより多くの人の目に触れることができれば幸甚に思います。

◆ご感想、ご意見、ご提案などございましたら、広報室までお寄せください。

出版委員会委員長 井出 元

出版委員会委員長

井出 元

委員(外国語学部)

淡島成高、石塚茂清、杉浦滋子、鈴木康之

委員(国際経済学部)

竹内啓二、花枝美恵子、保坂俊司、堀元子

鷺津泰邦(ブラザ事務課長)

三浦有三(企画部副部長)

事務局

鳥潟貞幸、鈴木敦子、小林友紀子

## 『麗澤教育』第十四号

二〇〇八年四月一日

編集 出版委員会

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 〇四―七―七三―三〇三〇

印刷所 株式会社毎日新聞東京センター

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー